

*Thank you for
all you have done
for us.*



October 1st, 1936 - January 25th, 2013

佃幹夫先生追悼文集

1936年10月1日	大阪市天王寺区で生まれる
1949年	六甲中学入学
1955年	日本体育大学入学
1959年	六甲学院に着任 第3回兵庫県総合体育大会 ベスト4 準決勝対神戸0-3で敗れる 第12回近畿高等学校サッカー選手権大会に出場（於：和歌山） 佃先生初の近畿大会出場（六甲運動部史上初の近畿大会出場）
1960～1961年	神戸市内の中学の全タイトルを獲得
1962年 5月	第13回神戸市内高校神戸市新人大会 MWフォーメーションを採用し、 神戸高校を破り優勝 決勝対御影高3-0（於：神戸高）
10月	秋季県大会神戸予選優勝
11月	三都市（京都・大阪・神戸）大会優勝
12月	県大会3位→近畿大会出場
1963年	兵庫県高等学校新人サッカー大会 ベスト4 準決勝対市西宮1-1（抽選負け）
1964年4月1日	宏子さんと結婚、芦屋市に新居を構える
1964年	第19回国民体育大会予選 ベスト4 準決勝対福崎1-2で敗れる
1965年9月29日	長女・久美子さん誕生
1966年	中学 三都市大会出場 準優勝 近畿大会出場 対大淀7-1 対箕面3-0 →甲陵 0-0 抽選負け3位 兵庫県高等学校新人戦大会 準優勝 準決勝 対報徳 1-0 決勝 対関西学院 2-7

ヒストリー

1967年	第19回近畿高等学校サッカー選手権大会に出場（於：滋賀）
1968年11月15日	長男・和弥さん誕生
1970年9月5日	次女・裕美子さん誕生
1970年	兵庫県高等学校新人戦大会 ベスト4 準決勝 対関西学院 0-1 第23回近畿高等学校サッカー選手権大会に出場（於：兵庫）4位（3位決定戦 対三原 0-1）
1971年	第15回兵庫県高等学校総合体育大会 優勝 準決勝 対県芦屋 2-1 決 勝 対県尼崎 2-1 全国高等学校総合体育大会（於：徳島） 1回戦 対米子工 4-0 2回戦 対浜名 1-2 兵庫県高等学校新人大会 準優勝 準決勝 対県尼崎 1-0 決 勝 対神戸 0-2 第24回近畿高等学校サッカー選手権大会に出場（於：滋賀） 1回戦 対建国 2-3
1972年	30期 神戸 弥、渡邊正直 第27回国民体育大会（於：鹿児島）に出場 1回戦 対北海道 2-3 両名、東南アジア遠征に参加 8月10日 対タイ学生選抜 負け 8月12日 対香港学生選抜 勝ち 8月13日 対社会人選抜 負け 兵庫県高等学校新人戦大会 準優勝 準決勝 対葺合 2-0 決 勝 対県芦屋 1-4 第25回近畿高等学校サッカー選手権大会 優勝 1回戦 対敵傍 3-0 2回戦 対京都商 2-1 準決勝 対甲賀 1-1（抽選勝ち） 決 勝 対嵯峨野 1-0
1973年1月13日	次男・幸児さん誕生
1973年	第17回兵庫県高等学校総合体育大会 準優勝 準決勝 対兵庫工 1-0 決 勝 対神戸 0-3

1974～1977年	兵庫県高校選抜監督（昭和50年第30回国民体育大会で準優勝）
1976年	兵庫県サッカー協会常任理事（高校担当） 六甲ヒルケル創部、神戸市社会人リーグに加盟 [3部 ('77年) 2部 ('78年) を全勝優勝で '79年 1部に昇格]、神戸市総合体育大会社会人の部で兵庫朝鮮を下し優勝
1977年	近畿高等学校サッカー選手権大会神戸市予選で優勝 六甲ヒルケルが神戸市社会人リーグカップ優勝
1978年	六甲ヒルケルが佃先生とヒルケルさんと共にヨーロッパ遠征
1979年	六甲ヒルケルが神戸市社会人リーグ1部で優勝
1978～1993年	兵庫県サッカー協会第2種委員長
1978～1987年	兵庫県体育協会普及指導委員
1979年	FIFA ワールドユースサッカー選手権神戸開催にて宿泊担当
1980年	中学が神戸市市民大会で神戸FCを破り優勝 続く神戸市総体では決勝で高倉中に勝利し二冠を達成する 六甲ヒルケルが天皇杯関西大会出場。関西リーグ・ユアサ電池に惜敗
1981年	兵庫県高等学校新人戦サッカー大会 優勝 準決勝 对小野 3-2 決勝 対伊丹北 0-0 両校優勝 第34回近畿高等学校選手権大会出場（於：和歌山）2回戦 対清風 0-2
1982年	40期 堤康、41期山本雅彦 第37回島根国体に出場 優勝 1回戦 1-0 広島 2回戦 1-0 埼玉 3回戦 3-0 神奈川 準々決勝 3-0 石川 準決勝 2-2 (PK4-1) 東京 決勝 1-1 静岡（大会規定により両チーム優勝）

ヒストリー

1983 年	堤、山本の両名がイギリス・スコットランド遠征に参加 中学新人戦 準優勝 1 回戦 3-0 対垂水 2 回戦 1-0 対本庄 3 回戦 1-0 対高倉 準決勝 1-1 (PK3-1) 対山田 決 勝 0-5 太田
1982 ~ 1988 年	兵庫県高等学校体育連盟主任
1987 年	兵庫県総合体育大会 ベスト 16
1989 年	兵庫県新人戦神戸市大会 2 位
1991 年	兵庫県総合体育大会 4 位 和歌山遠征
1993 年 3 月	サッカー部顧問を退任

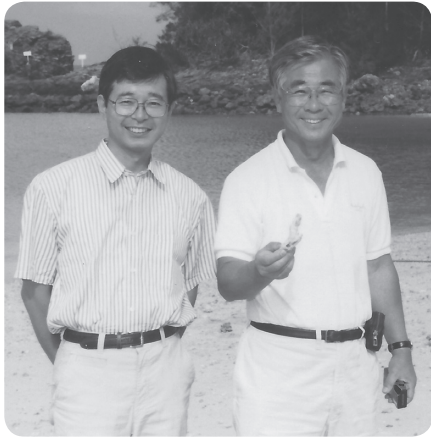


1993年4月	六甲学院教頭に就任
1994年	神戸市スポーツ功労賞受賞
1999年3月	六甲学院退職
1999～2002年	京都聖母学院中学校・高等学校校長
2002～2003年	聖母学院文化センター所長
2004～2008年	神戸海星女子学院マリア幼稚園園長
2006年3月	兵庫県サッカー協会会長就任
2010年	兵庫県サッカー協会顧問就任
2013年1月25日	ご逝去









40代最後の日 86年9月30日





昭和63年度 全国高等学校総合体育大会〈サッカー大会〉 昭和63年8月1日～7日
神戸市中央球技場・他



95年2月16日

藤田利明（元葦合高校サッカー部顧問）

「佃先生を偲んで」

佃先生とは、サッカーを通じての思い出がいくつもありますが、特に印象深いものが、2つほどございます。

昭和46年、六甲高校サッカー部が全国高校総合体育大会に出場することになりました。

全国に名だたる進学校である六甲高校は、当時は3月に行われる近畿高校新人大会を最後に、新3年生は引退をして受験勉強に打ち込むというのが例年のパターンだったように記憶しております。

その前年の昭和45年、サッカー部は近畿大会で好成績を残し、その学年が3年になっても引退せずに総体に出場したいと希望したと伺っております。

そこで佃先生は、何とか生徒の思いを酌み、また同時に保護者の方々や学校の意向も大切にするため、文武両道の道を貫き通せるように、高校近くのご実家へ遠方の生徒を宿泊させたりして勉強時間の確保等、大変に尽力されました。選手の皆さんも佃先生の意図や立場を十分理解して、勉学に励んでおられました。結果が全国大会出場という大きな実を結んだのですから、佃先生、選手の皆さん、本当にお見事でした。当時のことは非常に印象深く、思い出に残っております。

また、ある時のこと、佃先生から淡路の小松先生のお宅に泊めていただいて釣りに行きませんかと誘っていただき、お世話になったことがあります。その年は、私の勤めていた葦合高校が県の高校総体で優勝して全国大会に出場しました。

実は、六甲高校が県の高校総体で優勝する前に、佃先生は小松先生のお宅に宿泊されたので、ゲンを担いで私を誘ってくださったのです。

その噂を聞いて、当時、県立尼崎高校に勤めておられた藤原先生が、翌年、小松先生宅にお世話になって全国高校総体に出場されましたので、高校総体に出たいのなら、小松先生のお宅にお世話になるようにと、もっばらの評判になったというエピソードも懐かしい思い出でございます。

サッカー協会での活躍も兵庫県高校体育連盟の委員長、国体の兵庫代表の監督、兵庫県サッカー協会の会長等、重要な役職を歴任されました。

頼りになる“つくさん”で、重役職をお願いす

るときには佃先生に、頼みこんでお願いしていたような気がします。とりわけ、兵庫協会長をお願いしたばかりに体調を崩されたような気がして、会長をお願いした一人として申し訳なく思っております。ごめんなさい。

六甲高校勤務中は、朝早くから学校に行き、体育教官室で朝食を作って食べているという話を聞いたことがあります。誰よりも早く学校へ行き、誰よりも遅く帰られ、六甲高校を愛し、六甲の生徒さんを愛してやまない先生でおられました。

葦合高校が県外のチームと練習試合を行うときは、佃先生をお願いしてチームを紹介していただいて練習試合に出かけて行きました。ですので葦合のサッカー部は佃先生にお世話になりながら強くなっていったのだと思います。

佃先生は本当に粉骨砕身して働き続け、ほんとのんびりする間もなく亡くなられたように思います。

奥様と御一緒に旅行でもしながらもっとのんびり過ごす時があってもよかったのにと悔やまれます。

亡くられる前年の4月に佃先生と2人で小松先生の所に伺いました。

その時、小松先生のご自宅の庭になっている甘夏を2人で食べたのですが、あの時の甘さ、おいしさは忘れられません。その後小松先生に案内していただきながら、のんびりと過ごしました。

佃先生の亡くなられた年の4月に、当時をしのびながら、佃先生の奥様、ご長男の奥様とお子様とで、同じコースを。やはり小松先生の案内でゆっくりと回りました。甘夏をいただきながら、1年前を思い出しました。

佃先生、どうぞ安らかにお休みください。

一北四郎（元御影工業高校サッカー部顧問）

「佃先生を偲ぶ」

佃先生と私の出会いは私が大学1年生の6月終わりの頃、神戸大学サッカー部が東京遠征した時に、日体大サッカー部の合宿所に安達先生（兵庫高校の1年先輩で当時サッカー部2年生）を訪ね、当時合宿所の寮長をされておられた佃先生のはからいで合宿所に泊めていただいたことがありました。私が大学を卒業、魚崎中に着任しサッカー部の指導を始めて以降は、中体連、高体連、兵庫県サッカー協会の役員として、随分長い付き合いとなりました。特に、高体連サッカーというより、佃先生が2種（高校生）委員長、私が副委員長兼技術部長のコンビで国体少年選抜チームの強化を進め、昭和58年島根国体において、静岡と延長引き分けの末に両者優勝を勝ち取ったことは実に想い出深く、その後には県サッカー協会高砂会長の英断で、英国（イングランド、スコットランド）遠征もさせていただきました。その時のメンバーには、六甲学院の堤君（3年：40期）、山本君（2年：41期）の2名が加わっていたことは申すまでもありません。

平成になり、佃先生も私もそれぞれ学校の管理

職となりサッカー協会の理事を退任しましたが、サッカーに対する情熱はその後もずっと持ち続けてきました。

県協会高砂会長が亡くなられた後、村田新会長体制のもと佃先生は副会長に就任されましたが、その後村田会長が去られ、佃先生が会長に推薦された際に、高砂会長なき後のサッカー協会の体制に不安を持つ私が、佃先生に会長就任をいさめる形になったことは、今となっては残念でなりません。



英国遠征時の写真

左からエジンバラ市長、オールドパー（ウイスキー会社）社長、前野団長、佃先生（総務）、一北監督



英国遠征時の写真 スコットランド プレミアリーグ エジンバラ市
ハートオブミドルシアン ホームグラウンド（ハーツ） 対戦スコア 1-3 ハーツU19 チーム
前列左から4人目 堤康（40期） 後列左から2人目 山本雅彦（41期）

吉井宏一郎（元県立星陵高校、御影高校サッカー部顧問）

「佃先生との思い出」

昭和45年の兵庫県高校選抜チーム立ち上げ当初から9年間、先生と共にチームづくりや強化に携わり、社高校や炎天下の蕪崎市釜無川河川敷での合宿で共に汗を流してきました。

特に、先生が監督に就任された昭和50年三重国体。1回戦で高校サッカー公式戦初のPK11-11で日没翌日PK再試合を征し、強豪埼玉県選抜をも撃破しての対静岡県選抜決勝戦。雨の中での戦いを良く耐えたが1-0で惜敗し、メガネの下では悔し涙。昭和53年長野国体では3位決定戦で神奈川県選抜と対戦し、圧倒的不利の予想を覆す会心の勝利で溢れんばかりの笑み。選手達をご褒美に黒部ダム見学に連れて行き思わぬ雪に見舞われたことなど、今でも鮮明に覚えております。

常日頃から心がけておられたのでしょうか、度々の練習会や強化合宿における指導においても自校、他校の選手を区別することなく、いつも公平に選

手以前技術以前に高校生としてあるべき姿、心構え、態度を厳しく指導されておられたのが印象的で、その指導姿勢は今でも私が佃先生を尊敬して止まない所以でもあります。



第30回国民体育大会秋季大会サッカー競技昭和50年10月26～31日 於 三重県上野市

三重国体（昭和50年）伊賀上野。選抜チームで初の決勝進出を果たしたが、決勝で静岡県選抜に惜敗。
 畑監督 小和・吉井コーチ



長野国体（昭和53年）大町。3位決定戦で神奈川県選抜に勝利。
 畑監督 小和・吉井コーチ

市川雄一（六甲中学校・高等学校体育科教諭
サッカー部顧問）

「佃先生との思い出」

佃先生と私の出会いは今から40年以上前にさかのぼります。

1970年、当時県立芦屋高校2年生だった私は、兵庫県高校選抜チームのコーチとしての佃先生と初めて出会いました。

また1971年全国総体に六甲高校が初出場した際、準決勝の対戦相手は私たち県立芦屋高校でした。

私は高校卒業後の進路として体育大学への進学を希望していたため、佃先生の大学時代の同級生が当時サッカー部の監督をなさっていた日本体育大学への進学を勧めて下さいました。

また、県立芦屋高校の顧問と佃先生が親しい間柄であったことから、通常なら母校の県立芦屋高校へ行くべき教育実習を、私は卒業生でもないのに六甲でさせて頂き、そのまま夏休みに入り、なぜか久美浜キャンプにも最初から最後まで（当時は中1中2の2学年の行事でした）参加させて頂きました。

教育実習の指導教官としてアドバイス頂いたことは、今の私の心の中にいつまでも残っております。以下の言葉は私の教育実習の指導案に先生の直筆で書いて頂いた言葉です。

◎言語教育を徹するため指導者の位置を考えると。

◎初心者の心理面をよく理解してよい指導である。

その後教員として六甲に奉職し、佃先生は1976年から兵庫県サッカー協会高校委員長に就任され、また学内においては1993年まで佃先生が監督、私はコーチという関係で、サッカー部の指導をさせて頂きました。

長い間ご一緒させて頂き、誰よりも近いところで過ごしたため、ここでは表し切れないほどたくさんの思い出がありますし、言葉にならない思いもあります。

心残りと言えば、OBチームのヨーロッパ遠征の2回目を、佃先生団長で実施できなかったことです。先生と一緒に、卒業生でヨーロッパ遠征の旅に行きたかったです。

佃先生、長い間本当にありがとうございました。安らかにお休みくださいませ。

12期 山田経三

「佃幹夫様 また会う日まで」

佃君は12期同期の親友で、中1から高3までずっとサッカー部で一緒に頑張っていた。卒業して彼は体育の先生をめざして日本体育大学へ、私はイエズス会神父を目指して上智大学へ。大学2年生の時、両校のサッカー対抗試合があった。彼はベンチの奥に座っていた。「おい、ツクツン、ベンチウォーマーやってるのか。ボクはキャプテンやで」と言うと笑っていた。お互いツクツン、デンさんの仲だった。

時たま六甲に帰ってくるとサッカー部の練習を見るのが楽しかった。生徒たちが円陣を組んでいる時、その中に入って言った。「佃先生は生徒の時よくサボりよったのでキャプテンとして苦労したわ」彼は「それだけは言ってくれるなよ。オレの権威が落ちてしまうやないか」

ブラザーヒルケルさん（愛称 豚コックさん）はいつもよくサッカー部のことを大事にしてくれていた。ある時、2人を彼の部屋に呼んでくれ彼の撮った沢山の写真を見せてくれ、彼がなぜサッカー部が好きかを話してくれた。

佃君が中学生の時、洗礼を受けた際、私がその代父を務めた。霊名は大天使聖ミカエル。彼は先生としてだけでなくカトリック信者としても立派で、六甲で模範的だった。あまりに多くの生徒の代父になるものだから、彼に言ったことがある。「こんなにたくさんの面倒、オレはよう見きれんぞ。ツクツン、お前自身がしっかりと代父の務めをやってくれよ」と。彼は「任しとけ！」と答えた。

他にこういう話もあった。彼はやがて女子中高の校長を務めるようになった。ツクツンに言った。「かつての鬼が今では実に優しい笑顔一杯の佃校長になったんだ」と。

彼は確かに六甲中高の伝統、厳しさと共に優しさ、生徒をよく世話し、指導し、寄り添いたわる立派な先生であった。体育の先輩である増田先生（マツさん）、友方先生の後継の務めをよく果たした。前述の通り、それは六甲にとって誇りである。カトリック信徒としても、実に見事にその責任、任務を果たした。

今は天国で武宮隼人校長やマツさん、友方先生、豚コックさん、その他多くの六甲の先生方と共になつかしい六甲のことを話し合いながら地上に残

り生きている私たちみんなのことを見守っていて下さっている。

佃先生、どうか私たち一人ひとりの祈りを取り次ぎ、いつも見守っていて下さい。これこそ聖徒の交わり諸聖人の通功ですから。

佃幹夫様、それではまた会う日まで。

18期 太田省司

「佃先生の思い出」

佃先生との出会いは、昭和32年のサッカー部の合宿の時でした。

当時武宮先生の方針で、中学一年生は夏休みが終わるまでは、どこの部に体験入部をしてもよいことに成っており、私も最初は軟式テニスに入りましたが、ラケットにボールが当たらないので辞め、バレー部ではバレーボールを足で蹴ったと先輩にこっ酷く叱られて、怖くなって辞め、バスケット部は狭いコートなので楽かなど入りましたが、試合中はずーっと走り詰めなので、アカンと辞め、夏休み前にはキャンプに連れて行ってやると言われて、ホイホイと付いて行ったのですが、お前は

体がでっかいからと、リックサックの中身を他の生徒の倍にされ、こんな不公平な部には入らないと逃げ出し、最後に行き着いた部がサッカー部でした。サッカー部は手以外の体全体でボールに向かって行けるので入部したような気がします。

当時の先輩方は練習でも厳しく指導して呉れましたが、まさか鬼の先輩が居ることは未だ知りませんでした。

当時先生は、日体大の二年生だと言うことは聞いていました。合宿の始まった日はあまり記憶が残って居ませんが、翌日の起床時から叩き起こされ、朝の柔軟体操が始まり、今まで見たことも違ったこともないコサックダンスを遭らされて、柔軟体操どころか体がヒーヒー言っていたのを思い出します。

練習も今までの先輩の指導では無くて、ボールのトラッピング、サイドキックでパスの練習、などなど基礎からの練習で、わけも分からず佃先輩の言うままに練習をしていたのを思い出します。

3日目の朝は、小便に行くとき何時もより小便の色が濃くなって居り、先輩に聞くとまだまだと言われましたが、一週間の合宿が終わるころには、小便が黒ずんだ茶色に成って居たのを覚えています。

この様な合宿が3年間続き、佃先輩が日体大



六甲運動部史上初の近畿大会出場メンバー：後列左から：谷垣、大永、末正、北村、奥野、山本、姫野、太田、有本、港、前列左から：井田、佐野、吉川、吉田、山田、響尾



を卒業すると聞いて、来年からは地獄の合宿は無くなると思ったのも翌年の3月まで。新学期の始業式の日には新任の先生の紹介が有り、その顔を見た途端に佃先輩が先生として立って居られた。地獄は行ったことは有りませんが、地獄に逆戻りしたような気分でした。

高校二年生になり、週三日の練習が思いやられました。

事実、練習では左手に小石、右手に竹の棒を持って厳しく躡けられ、先生の遠くにいると中学生がケツを蹴りに来たりしながら、心のこもった愛の有る練習をさせて貰いました。

試合の時も、良くあれだけ大声で怒鳴られるものだと思うくらい、怒鳴られて試合をしたものです。

格下の学校と試合をしたときに、先生が用事で来られずに、我々だけで試合をしたのですが、何時もの様に先生の御指導（罵声）が聞こえないので、調子が出ずに勝つのは勝ちましたが、翌日の練習では、試合の時の倍以上の御指導（罵声）を頂きました。

しかし、佃先生のお蔭で兵庫県代表では19期の後輩諸君と一緒に近畿大会にも出場でき、人生の大きな思い出になりました。

昭和41年ころ、社会人に成って暫くして、合宿を見に行った際に「先生最近少し生徒に甘いのではないですか？我々の時にはもっと怒鳴られて

いたように思います」とお聞きしたら、最近ではあまり厳しく練習をさせると、父兄からクレームが来るので、以前の様には練習を出来ないと言って居られたのが思い出されます。いわゆる“モンスターファミリー”の始めでしょうか。

お前らの時も一人一人の顔を見ながら、へたばるぎりぎりまで練習させとったよ！言われたのが心に残って居ます。

酒は飲まず、タバコも吸われない佃先生が何故癌になど成るのか、世の無情を感じずには居られません。

まだまだ、先生には人生の指導をして頂きかったのに、残念で成りません、心より佃先生のご冥福をお祈りするばかりです。

22期 辻禮治

「佃先生との不思議な縁」

先生が1959年(昭和34年)母校六甲学院に体育教師として赴任された4月、私が六甲中学に入学。5月、新任教師と新入生、二人の間に思いがけない出来事がありました。体育の授業中、先生は体力測定結果を見ながら、「辻君、何部に入っている？」と質問。「野球部です」小声で答

えると、「君は足が速いが、上半身の筋力が弱い。野球部に向いてないな。明日からサッカー部の練習に参加すること」と大声で指示。サッカーの知識もなく、ボールを蹴った経験が無い自分にとって判断基準はなく、先生の指示通り翌日からサッカー部の練習に参加。それが54年の長い付き合いの始まりとなりました。

当時のサッカー部は18期、19期を中心とした高校生チームが兵庫県トップクラスで近畿大会に出場するなど部活動は活気に満ち溢れておりました。中学1年生を中心とした新しいチーム作りを念頭に、先生の厳しい指導のお陰でチームは実力を高め、中学3年生時に神戸市の大会、神戸・大阪・京都の三都市中学校大会に優勝するなど目覚ましい活躍であったと記憶しております。

中学3年生の時、先生が「昭和39年10月の東京オリンピック開催に伴い、新潟国体秋季大会が6月の春季大会に前倒しされる。高校3年生6月まで部活動できる許可を武宮校長からいただいた。新潟国体に絶対行くぞ」とサッカー部初めての全国大会出場を語られた。その後3年間、厳しい練習に耐える事が出来たのは大きな夢をメンバー全員が共有出来たチームワークのお陰であったと思います。

サッカーの魅力は「先進的な攻撃戦略」です。「六甲は練習時間が短い。体力面で劣る。頭を使え。相手が想定できない戦略で勝てるよう密度の濃い練習をする」が先生の信念でした。現在のサッカー界ではフォーメーションは4-2-4、4-3-3、4-4-2等が主流ですが、約50年前は攻撃、守備を明確に区別した「W（攻撃布陣）& M（守備布陣）フォーメーション」でした。先生はチームメンバーの技量をより発揮させるべく、「M（攻撃布陣）& W（守備布陣）フォーメーション」を採用、ツートップの下に3名の攻撃陣を配し、中盤の攻撃に厚みを増し得点を狙う積極的な戦略でした。作戦は相手チーム守備陣に混乱を招くと同時に我がチームには大いなる自信をもたらせ、県の強力高校と互角に戦う事が出来るまで成長しました。

高校3年生の5月、六甲高校サッカー部の夢である新潟国体出場を賭けた県予選が始まり、六甲は順調に勝ち上がり準決勝を迎えました。相手は今まで対戦のない福崎高校。佃先生は当日所用で欠席。我々同期6名は試合を任せられ、戦いを進めなければならない状況。アップの時より全員が緊張気味でいつもとは異なる雰囲気。不安は決

中、六甲が押し気味に試合を進めるが決定力不足。前半のリードを後半に逆転され、度重なる絶好のチャンスもパスミスやシュートミスで追い付けずまさかの敗退。試合後の焦燥感、挫折感は今までに経験のないものでした。後日、先生は試合の内容に一言も触れず「高校3年生までサッカーを続けてくれてご苦労様。六甲サッカー部に新しい歴史を創ることが出来た。有難う」と初めて褒めて戴きました。

佃先生、六甲サッカー部の夢である「全国大会出場」の夢を叶えてくれたのはこの敗戦より7年後の1971年（昭和46年）全国高等学校総合体育大会の徳島大会。第29期を中心とした六甲高校史上最強のチームでした。六甲サッカー部監督就任12年目の快挙。先生の長年に亘る指導が大きな花を咲かせました。本当におめでとうございました。

大学生の時、先生よりお誘いを受けサッカー部の練習のお手伝いを少しさせていただきました。メキシコ五輪での日本サッカー銅メダル獲得によりサッカーブームが起こり、高校2年生（第27期）から中学1年生（第31期）総勢80名近くの大所帯、小学生時代地元のFCで活躍していた将来有望な生徒が数多くおりました。

1968年の3月、26期を中心とした高校生のチームが近畿大会に出場しました。佃先生が学校行事の為参加できず、滋賀県甲賀市水口町で開催される大会への引率と代理監督を任せられました。初戦は順調に勝ちましたが準決勝で大会優勝校の甲賀高校に惜敗。高校生チームを纏めることの難しさを肌で感じると同時に先生の指導力の素晴らしさを改めて教えられました。

夏には長野県戸狩村の民宿で、夏合宿に参加しました。学校より大型バスでの移動、車中は遠足ムードの大賑わい。現地でのグラウンドは民宿より徒歩30分、草むらとしか表現できないグラウンド。ゴールポストも無い所でしたが、ワイワイ楽しい合宿でした。一番びっくりしたのは「“鬼の佃”が“仏の佃”に大変身」したことです。信州の素晴らしい環境の下、生徒達にのびのびサッカーをしながら楽しい夏休みを過ごさせたいと思う親心の顕われだったのかも知れません。合宿に同行した23期の湯川君共々、先生に感謝でした。この中学生達が1971年の全国高等学校総合体育大会に初出場したメンバーです。7年前に22期が果たせなかった夢を実現させてくれたのです。

岩谷産業（株）大阪本社より1985年に東京転

勤、中国上海駐在、二度目の東京勤務を終え2005年4月大阪本社に転勤、20年振りに西宮の自宅に戻りました。

4月末のある朝、阪急夙川駅へ向かう途中、駅北口の交差点の向こうから「おいー、辻君。久しぶりやなあ、元気か」と手を振り叫ぶ声。誰かと思って近づくと優しい笑顔の佃先生でした。しばしの立ち話し、非常に懐かしい偶然の出会いでした。

六甲学院を定年後、京都聖母学院中学校・高等学校の校長等を歴任され西宮市木津山町にある「神戸海星女子学院マリア幼稚園」の園長をされておられました。

それからは、毎朝同じ時刻に先生は駅前の交差点で私を待っていて下さいました。別にこれと言った言葉をかける事も無く、手を上げての挨拶。佃先生らしさを満喫させていただきました。

縁があって、娘雅子(まさこ)の長女柚希(ゆずき)が2007年から3年間、長男馨太郎(けいたろう)が2009年から3年間マリア幼稚園にお世話になりました。孫が佃先生のお世話になるなんてまるで夢のようで、孫達に「爺は、園長先生に六甲中学校でサッカーを教えて貰った。凄いだらう」とよく自慢話をしました。

神戸海星女子学院大学のグラウンドを借りて行われる幼稚園の運動会で佃園長に年一回お会いできました。グラウンドには黙々と小石を拾われる佃先生の姿がありました。「お疲れ様です」とお声をかけると、「子供達が怪我しない様に周りが気を付けないとね」とお話されていました。第三グラウンドで練習前に黙々と石拾いをされていた先生の姿を思い出し、「生徒思いの優しさは本物だ」と感嘆させられました。

2008年3月に園長を退任後もマリア幼稚園の運動会で先生にお目にかかれる事が楽しみでしたが、2010年10月の運動会でお姿を拝見出来ず非常に心配しておりました。

11月中旬、24期の大石伸雄君より「最近佃先生に元気が無い様です。先生をお招きして激励&食事会をするので先輩是非参加を」との誘いを受け、先生共々大石君宅で楽しいひと時を過ごしました。

中学、高校時代の思い出や2007年6月の22期還暦同窓会に出席頂いた事などの話に耳を傾け、楽しい表情で頷かれる笑顔が印象的でした。先生のお話は時々、回線混乱を起こし途切れがちでした。多分お歳のせいだろうなと思いつつも心配が

残りしました。お帰りの折り、「お元気で。またお会いしましょう」と声をお掛けすると「君も還暦を越えているから無理せず元気で頑張れよ」を逆に励ましの言葉を頂戴しました。

今から思えばこの日が佃先生との最後の出会いとなってしまいました。残念です。

佃先生との中学1年生での出会い、全国大会出場を目指しての熱血指導をいただいた六甲サッカー部の思い出。夙川駅での約20年振り偶然の再会、孫2名がマリア幼稚園でお世話になったこと。先生とは非常に深い縁があるように思えてなりません。

教師、監督の立場での教育。兄貴の立場での注意さらには人生の先輩としての助言を賜りました事、本当に光栄に思っております。

先生の六甲学院、六甲サッカー部への大いなる貢献に敬意を表し、最後のお別れを申し上げます。お疲れ様でした。そしてありがとうございました。

23期 湯川昌明

「大家族主義者」

35年前にサラリーマンを辞め阪急六甲に事務所を開設したが当然仕事も無く毎日製図板に向かいながら架空の未来予想図を描いていた。そんな暇を持って余した事務所に、ある日突然ヒルケルさんと佃先生が現れた。ハイライトをメリメリと燃やししながら「ヴォッフお・ヴォッフオ、ちゃんと仕事しとるか？親孝行せんとあかんゾ！ヴォッフお」とヒルケルさんは言い「季刊紙“蹴虫”の編集を手伝ってくれへんか？」と佃先生が言ったので時間が存分にあった私は二つ返事でOKをした。六蹴会の事務局的な活動は数々の思わぬ御相伴にあずかる事となった。10期の鈴木昭会長からは須磨の家の設計を依頼され19期の港先輩のベルギーから送られたワールドカップ・チュニジア戦の15枚のプレミアム・チケットの一頁になる事が出来た。

サッカーの名選手では無かった私にとっては高校を卒業してからの佃一家とのつながりの方が濃かったが、良く観察してみると奥様の存在が大きく、淋しん坊の先生は結婚を機に甘えん坊になったような気がする。「ヒルケル少年サッカー団」そして22期の辻さんと「戸狩の夏の合宿」にも



参加し、私が吉越荘のスクーターを田んぼにブッ込んだのも今では半世紀前の伝説となってしまった。もう一つの「戸狩の春のスキー合宿」では子育てと子供への愛情表現を直接教えてもらった様な気がする。毎年3月の末、数家族約40名がバス1台でスキーに行くのだが、その集団は佃幹夫を核とした大家族となるのだ。私の1人息子は佃家の5番目の子供として躰され、和弥の友達のエンマ君も家族の不幸を皆で癒された。

人生というものは滔々と流れる川の様なものだ。それぞれが自分の流れを持ち合流したり分れたりしながら時という歳を重ねてゆく。私は佃幹夫という大河と遭遇した事によって豊富な人脈を得て、そして家族を大切にするという人生訓を教えてもらった様な気がする。

なに？佃先生が亡くなったって？…冗談じゃありませんぜ！…鬼、仏など数々の戸籍を持ったお方ですヨ…今でもそこらじゅうで訓育の指導をされてますよ…ほら先生の名前を思い出した貴方！先生の気配を感じていま背筋がスッと伸びたじゃありませんか・・・

23期 和田秀博

「佃幹夫先生との出会いと我がサッカー人生」

佃先生に会いたくて、昨年末奥さんに電話したところ「主人は、人生を猛スピードで走り抜けてきました。今は静かにしておいてやってください」と言われた。

私は御影小学校の時、ショートで4番を打っていた。剣道は1級で当時の神戸新聞の地方面に掲載されたことがある。

中学に入っても当然野球部を目指していた。体育の授業で佃先生から、春先のある日、「和田、お前は運動神経が発達している。野球部に入りたそうだが、世界を見渡すと、サッカーが主流だ。サッカー部に入れ」と言われた。私は尊崇する先生にはきわめて従順で、即座に「では、入ります」と応じた。

まだ、サッカーと言うより蹴球と言う人のほうが多かった時代である。

先生の教えの一つに3Bがある。即ち、ボールコントロール、ボディバランスあと一つは忘れた。高校生に山田恭三さんがいた。後に大阪工業大学(以下大工大と略す)サッカー部主将を経て大林組に入った人である。

サッカーは高校3年の終りまで続けた。高校

のとき、県予選まで行ったのが最高だったと記憶する。

一度、先生のお宅へ同級生数人と行ったことがある。子だくさんで小さい子どもたちが喜んでじゃれついてきたのが思い出される。

私の学業成績はかなり良かった方であるが、なにしろ団塊世代のピークの年であり、大学受験はかなり厳しかった。高校3年の秋に誰かが「人間の条件」の劇をやろうと言うのに対し、少し大学受験が馬鹿げていると感じていた私は、すぐに手を挙げた。敵の捕虜を虐待する悪者の鬼軍曹で、主人公に対抗する役で適任だった。

親父が大阪大学医学部卒で後に神戸市衛生局長になった偉い人だったので、身分もわきまえずココを目指していた。

浪人して滑り止めの大工大電子工学科に入学し、直ぐにサッカー部に入った。一年のブランクは大きく、5月の連休の練習はきつかった。

大工大サッカー部は2部(当時6部?まであった)の最下位にいた。

秋に大阪大学との最下位決定戦があった。相手には1年先輩の宇川さんと三宅さんが3回生として活躍していた。

私はFWで出場していたが、ペナルティーエリアすぐ外からの相手フリーキックを宇川さんが蹴る。私は壁で左から2人目の位置にいた。

宇川さんが私をぐっと睨む。すくんでしまった。ボールは私の右ふとももをかすめて直接ゴールイン。前半0-2。

後半3回生の別宮(ベック)さんが、右からのクロスシュートをゴール左隅に見事に決め同点。そしてセンターライン左端付近数メートルの位置から私がゴール中央付近へ上げたボールを名手三宅さんがヘディングミスで後ろにそらし、オウンゴール。

結果3-2の逆転勝ち。

「宇川から、和田のところに負けた」と後から佃先生から聞いた。

総合大学(University)に単科大学(College)が勝った。

3回生になって主将となった。

ポジションは4:2:4の2の左。今のボランチの位置である。右は韓国籍の李正系(私がうわさを聞き、招き入れた者)。

大阪府大と引き分け、立命大には1-4で完敗したものの徐々に調子が上がり、迎えた京都大学戦。

私は言った。

「今日は作戦を変える。俺は相手ゲームメーカーの山中(神戸高校卒)にはりつく。あとは普段どおり自由にやってくれ」

そして90分山中にはりつき、彼の走るところをつまわした。パスしてくるボールをカットし、シュートを1本打たれたが、体を入れていたのでゴールサイド右外側をすり抜けた。結果は1-0、1-0の完勝。

名監督の先決先生から

「良くやった」の一言が今も耳の奥に残っている。1位は全勝で立命が確定していた。

最終戦前日の土曜日。立命対京大戦があり立命が勝てば、最終戦の甲南大学に我々が勝つと逆転で我々が1部との入れ替え戦に出場できる。

4回生の一人が言ってくれた。

「和田よ、来年1部でやれるなら、俺は留年する」と。

京都まで見に行ったら立命対京大戦。京大の執念がすごかった。結果京大の1-0。夢は消えた。次の日の日曜日。朝からのどしゃぶりのウツボ公園。最高潮の我々は5-0の完勝。この時、来年の主将に決めていた古澤賢治をセンターフォワードに起用した。

後半左からのフリーキックを私は泥だらけでボタボタのボールを考え、トウキックでゴール前に思いっきり強く蹴った。それを古澤がほとんどダイビングヘッドの形でゴールに突き刺してくれた。

社会人になって関西電力大阪北支店配属となり、さっそく入部した。大学卒は私一人。ラベルもレベルもワッペンも雲泥の差。

今のボランチのポジションでハットトリックをした。そのうちの1点がフリーキック。いわゆるバナナシュートが右下に決まったとき、吹田営業所の北村君が抱きついてきた。私は特に感激はない。普段練習のとおりしただけのこと。

3部から2部に昇格し、本店勤務となり、サッカーとは一時離れることとなった。

45歳位のとき、大工大サッカー部後援会会長であり、大阪フットボールクラブの創始者の一人である塚本洋之さんから「和田君、一緒にサッカーをやろう」と誘われていたが、仕事とキリスト教会日曜学校教師のボランティアが忙しく断っていた。

53歳位になって大阪フットボールクラブに入会した。色々な思い出があるがここでは割愛する。

60歳になって地元の神戸フットボールクラブに代わり、現在に至っている。

その頃、佃先生が兵庫県サッカー連盟会長をされており、鼻が高かった。

神戸フットボールクラブの60代の清澤監督から、転部早々「和田、ゴールキーパーをやってくれ」と言われ、サッカー生活の生涯で唯一やっていないポジションでもあり快諾した。

さっそく神戸元町のKAMOで服装を準備した。パッドが入っているため、値段が倍ほりする。

5年ほど前、名古屋に遠征したとき、3試合を完封した。私も2つほどセービングに成功した。

中に今の名古屋グランパスの前身のOBチームがあったが、こちらも関西大学や関西学院大学など大学1部の選手が多数おり、遜色は無かった。

平成16年末に塚本さんが亡くなられ、数年間後援会会長が不在であった。

前述の山田恭三さんや元高石市役所都市計画部長で一時大阪府サッカー連盟会長であった山野喜弘さんなど4～5年先輩らから「和田、後援会長をやってくれ」と言われ、サラリーマンの現役だったし、あまり余分な金も無かったので若干躊躇したが引き受けた。

今年は、コーチ業にも再び力をだそうと思っている。

つけたしになるが、囲碁五段、将棋三段、麻雀プロ級で忙しい。

囲碁梁山泊という季刊誌の取締役営業部長を拝命。神戸のジュンクドウや小さな碁会所をこまめに廻り、1冊600円の雑誌を売り歩いている。

自分でも今までに囲碁ライターの一人として活躍してきたつもりだが、これからも1年に一度は記事を書こうと考えている。

麻雀は8月に「中央電気倶楽部」に入会し即優勝した。11月には関西電力OBでつくる麻雀大会で準優勝—とツキまくっている。

この2月には、大学に入ってサッカーを始め、ゴールキーパーをやってくれた清水健二（広島県在住）—あの頃はマットなど無く、砂場でセービング練習をしていた。あちこち擦り傷だらけだった—。最近はいつも一緒に大工大サッカーの応援に行く西宮東高校出身の永井修。そして一年後輩である前述の古澤賢治（今は退職し、岡山県浅口市の田舎で農業を営む）—彼の息子は東京大学を出て、請われてNTTドコモにいる—。この4人が中間地点である岡山駅に集合する。清水と会うのは40年振りとなる。諸々の話が出るだろう。

今から楽しみにしている。

思えば佃幹夫先生との出会いが、今日の私の大きな部分を占めている。

26期 居内健二（主将）

「佃先生の思い出」

【主な戦績】

<中学3年>

神戸市大会 準優勝

兵庫県大会 準優勝

どちらも決勝で魚崎中学に敗れました

<高校1年>

県新人戦 準優勝

殆ど全員1年生で戦い、関学に完敗

<高校2年>

県新人戦 ベスト4

昨年の実績から自信を持って臨みましたが準決勝で惜敗

【思い出】

我々は佃先生から期待された学年だったと思います。その根拠として、我々の1・2学年上のサッカー部員は殆ど居ませんでした。佃先生がやめさせたとの噂もあります。（先輩方すみません）

また、我学年は15人程度の部員がいて、同学年だけでチームが作れました。（当時サッカー人気は今よりずっと低くて1学年大体6～7名の部員数でした）

中学2年の夏休みの立山の山小屋に合宿と称して、遊びに連れて行ってもらいました。先生は3年生になると大会出場と遊びに行けないだろうからとの話でしたが、今から思うと先生の新婚旅行も兼ねていたのではないかと思います（奥様同伴でした）が実際3年になると神戸市大会、兵庫県大会、近畿大会と大忙しでした。

佃先生のお別れの会に出席した際、棺に我々が中学の県大会決勝時の寄せ書きしたボールが入っており、奥様から一緒に茶毘に付したいとお申し出を頂き、喜んで承諾しました。

佃先生、天国でこのボールを使ってサッカーを楽しんでください。

ご冥福をお祈りします

26期 立間康裕（中学3年間所属）

「佃先生を偲ぶ」

佃先生、中学の3年間で退部し、申し訳ない思いで一杯です。

伯友会での「特別授業」の後、先生に気持ちを話せたのが救いとなっています。

その後もサッカーは大好きで、就職後も職場のチーム（大阪市土木局）で、28歳（大阪社会人2部）まで佃イズムで頑張りました。

今でも先生と同じく、ボールを見ると蹴りたくなります。

いつか一緒に蹴りましょう！

ご冥福をお祈り致します。

28期 伊野部毅

「佃先と六甲サッカー部の事」

僕自身は、佃先から無茶苦茶、言われた事はなかった。それほど期待されていなかったのかもしれない。ただ、主将の野村は、いっぱい言われた

のかもしれないが。

佃先生の思い出は、グラウンドの石を集めてこいと言われ、集めたら練習でドジやミスしたやつに石を投げていた事。信州の合宿で、佃先が話をされて、中北のよっちゃんが、泣いていた事や素足になって、みんなで黄色のボールでキックの練習をした事など色々ある。が3つを書きます。

1つ目は、佃先が大学生の時、アルバイトでグラウンドの草むしりをした時の話。

草むしりをせないかんから、一生懸命雑草を根っこからむしりどっていたら、それを職にしている草むしりのおばさんから、「そんな根っこから抜いたら、又生えてこんやんか。私らの仕事がなくなってしまう」と怒られたと。

2つ目は、中学の時に、淡路島の江井での海のキャンプの時。うろ覚えだが、10人ぐらいずつ何班かに分かれ、海に入って泳いだ。泳いで浜に上がってきたら、自分の名前を書いた、木の板を、砂山に立てる事になっていた。双子の片岡のどちらかが、友達の木板を上がってきていると思って、一緒に立てた。そして、点呼の時にその友達がいなかった。そいつは体調が悪くて、少し離れた砂浜で横になっていたと思う。木の板が立っているのに、本人が点呼の時にいないのを佃先は怒って、片岡の頬を平手でたたいた。その時は、



怖いなど思っていたが、後でよく考えると、当たり前的事だなと思った。

3つ目は、就職して、1～2年目に初蹴りに行った時、「伊野部なにやってんね」と言われ、「ダイエーの魚売場で仕事してます」と言ったら、「骨を強くせないかんと、ちりめんじゃこを食えといったら、魚屋か」といって、笑っておられた。僕にとって佃先生は、「いつも日焼けした顔で、白い歯をみせ、いつも笑っていた」そんな人だった。

又、初蹴りの時にあらわれて、日焼けした顔で「元気でやっているんか」と声をかけてください。

今、六甲サッカー部50年史をみて書いている。佃先生の葬儀・通夜の時に、先輩や、同僚、後輩に会えた。うれしかった。佃先生が、みんなを集めた。

間違ったり、書き忘れたかもしれないが、先輩の鈴木・辻・湯川・村田・木元・居内・谷岡・多次・渡辺さんに会え、後輩の大橋・堂免・辰巳・小見山・宮本・濱田・中村に会えた。又初蹴り・28期の会では、野村・成田・柳に会えた。

50年史では、大谷薫平の話がいいなど思った。同じGKの広瀬は、弘前で医者をやっているらしい。

26期のGKの(故)中村さんにはお世話になった。黄色のギャランで、名神を140Kでとばしてもらった事もある。18期の山本和磨先輩には、姪っ子を紹介していただいた事もある。松崎・長谷川・雲井は元気でやっているんか？木元さんは、バイクに乗られていて若々しく感じた。

薫平の兄、大谷亮介は、演技家でTVの「相棒」に出ていて、いつも見ていた。

佃先生には『あったかい緊張感』というのがあった。『日焼けした顔で、白い歯をみせ、にこっと笑って、小石をなげる』という感じだ。

11/26(火)のTVワールドサテライトで32期の御立が出ていた。六甲の卒業生をみるとうれ



しくなってくる。

佃先生、ありがとうございました。これからも、六甲の卒業生を見守ってください。

28期 豊田巖

28期が六甲に入学したのは昭和40年、前年の東京オリンピックで日本がアルゼンチンに劇的な勝利を収めたとは言え、世間一般には、サッカーはまだマイナーなスポーツでした。生まれて初めてボールを蹴る者ばかり数人がサッカー部に入部しましたが、怖い監督と聞いていた佃先生は当時まだ20歳代でした。ある時、前年に校長を退任された武宮先生に、「佃先生の所でサッカーをしています」と申し上げると、「あの人は、よく鍛えるだろう」と仰ったのを、今でもよく覚えています。

2年上の26期が強く、中3、高1と三都市大会や近畿大会で活躍されましたが、28期が高校に進んだ時は部員が11人に満たず、野球、バスケット、物理など、他の部の人の応援を得てチームを編成し、神戸市大会をしのぎ、県大会に進んだこともありました。

その頃にはサッカーの人気も上がり、中学には40人近い部員が集まっていました。28期が高1、高2の昭和43年、44年の夏、長野県の戸狩で合宿を張り、グラウンドとはとても言えない草原で、握り飯2個と少しの水で朝から夕方まで練習したことも、今は昔の懐かしい思い出です。その後、29、30期は高校総体県大会で優勝し全国大会に出場、31、32期は近畿大会で優勝するなど、六甲サッカー部の黄金期を迎えました。

佃先生は現役部員だけでなく、OBや姉妹校との交流にも力を入れられ、六甲ヒルケルフトボールクラブを設立し、OBの社会人チームや、今は無くなりましたが子供のサッカースクールも立ち上げられました。来年第50回を迎える正月の初蹴りや、昨年第21回を迎えた姉妹校OB定期戦も、今後、更に歴史を重ねて発展していくものと思います。

佃先生には、「事を成そうとすれば本気で取り組まなければ成しえない」ということを教えて頂きました。それは、私のこれまでの人生において大きな柱でした。

先生、ありがとうございました。

29期 辰巳隆一

「あの時ばかりは笑福亭一門だった」

40数年前の六甲には、授業中に能書きを並べ立てる教師が多かった。時には小膝をたたいて、なるほどと思わせる話もあったが、大概はご自分の思想を述べ世相を悲しむばかりで大嫌いだった。その点、佃先は能書きを言わず、機嫌が悪いと怒り、機嫌が良いと怒る。極めてわかりやすく、サッカー部は居心地が良かった。そんな佃先がただ一度だけ能書きめいたことを言ったのをぼくは覚えている。

練習の途中で笛が鳴り集合がかかった。

「また目え囁んで死ねかいな」とぼくらは恐々佃先を車座に囲んだ。

佃先がおもむろに口を開く。「ええかお前ら、サッカーはな、伴奏や」

目を合わさないよう下を向いていたぼくらは一斉に視線を上げる。

「よう聞けよ、サッカーが伴奏で、人生はメロディや。伴奏がよかったらメロディもええ様に聞こえるやろ」佃先が心穏やかにぼくらを諭している。

「サッカーが好きになって、ええ伴奏になったらお前らの人生も素晴らしいもんになるんや、わかるか？」

その時返事をしたかどうかは忘れた。

つい最近、笑福亭鶴瓶さんの高座を見に行ったら、六代目松鶴師匠の思い出噺に笑い転げた。松鶴師匠は四六時中弟子を叱り飛ばすが、なぜ怒っているのかわからない。理不尽でも弟子は師匠に従うという。

「なるほど、佃先は松鶴師匠やったんや」とぼくは独りごちた。

弟子たちはどんなに叱られても落語が好きで師匠についていったという。

「なるほど、あのときのぼくらは笑福亭一門やったんや」と納得した。

さて還暦を迎えたぼくは、もちろんサッカーが大好きで、サッカーはいい伴奏をしてくれている。でもサッカー以外にも伴奏が増えてメロディが聞こえない。人生が迷っている。

29期 堂免直孝

「私には、佃先生は褒めちぎりでした」

先生の言葉を思い出しながら、下記、綴ります。ほとんど、怒られたり、殴られたりした記憶がないのですが、本当なんです。

☆高1の時、負けかけの真夏の第3グラウンドでの試合で

「堂免、おまえだけが頼りだ。頑張れ」

◆この後、私は「人は褒めて動かすものだ」と、その後の人生に大きく影響しました。

☆インター杯の前の練習で

「堂免、お前のいいところは、囲まれても倒れないことだ」（これって、殿堂入りされた大谷君のお父様、大谷四郎さんにも言われたました。）

◆サッカーはうまくなかったですが、褒めて貰って嬉しかったです。

「辰巳がコーナー蹴った瞬間に堂免はキーパー前から下がって井上がつつこむ、これがいい」

「後ろからきたフライのパス、右足のアウトで浮かせて、自分の頭を越すというのはどうでしょうか？」

「おー、それはいいなー、おまえなら効果的だから、やったらいい」

◆いいアイデアだと褒めてもらい、インター杯で何度かやってみましたが、得点にはなりません。

☆卒業して何年後だったでしょうか？

「29期が全国大会に行ったから、兵庫県サッカー誌に記事を出せるんだ」

◆とても嬉しそうで、喜んでもらえてうれしかったです。（今もその記念誌、家にあります）

☆20代後半、多分、初蹴りでー

「先生、僕らには今風のパスサッカー、教えてくれなかったですねー」

「お前らには、そんなの必要なかったんやー」（パスワークなど、教えてもらった記憶がほとんどないです）

◆練習時間も少なく、教えても出来ないから好きにやらせて、いい所を引き出してもらったんでしよう。

☆結婚式での仲人としてのお言葉

「彼は（優秀な成績で卒業とは言わないで下さい）
と言っています。非常に謙虚な人柄です」

◆人前でそんなこと言ってもらわなくてもいいの
に、と恥ずかしかったです。

☆神戸市小学生女子のチームを教えていて、震災
後のためグラウンドがなく、六甲学院で練習、練習
試合をさせて頂いたときの言葉

「小学生に練習前に、無理な柔軟をさせてはいけ
ない。体を壊すぞ」「あの小さい女の子2人、早
くてうまいなー、きっといい選手になるよ」

◆（今、2人とも、Lリーグでレギュラーです）
先生の才能を見る目、正しかったんですねー

☆7～8年前、葺合・藤田先生、佃先生を囲ん
での29期の夕食会で

29期のセンターバック柳君、ねだるような目をして
「先生、僕達の学年では誰が最優秀選手でしたか？」

先生、曰く、「そりゃー、柳、おまえやでー」

◆丸くなられて、ずいぶんとお上手も言われるよ
うになったんだーと思いました。

□余談

このとき、辰巳君はアキレス腱を切って、松葉
杖で参加。「情けないねー」と言ったら、翌年、
私もアキレス腱を切りました。

「わー可哀想ー、大丈夫？」とねぎらわなかつた
ので、バチが当たりました。

□最後に

六甲を卒業してからもずっとサッカーに携わり、
今は西宮で一般女子のサッカークラブでコーチを
しています。

仕事以外でまずまず出来て、世間のお役に立
てるのは、サッカーだけです。

今のライフワークがあるのは私を褒めちぎって
サッカー好きにした、佃先生の御蔭です。

2日前、年老いた母曰く「定年、そして囁託が
終わる65歳を過ぎてても、サッカーだけは続けな
さいね」

佃先生のご冥福をお祈りいたします。

29期 大橋裕

「佃先生の思い出」

高3の夏のことが鮮明に記憶に残っている。

総体・決勝で県尼との試合前、佃先生に「大橋、
頼むぞ」と肩をたたかれた。

ふだんあれだけどつかれたり罵倒されたりして
いるのに、その先生が「頼むぞ」というのは違和
感があった。

しかしそこまで言われて結果が出なかったらど
うしよう、という恐怖と先生自身が明らかに高
ぶっていることが伝わってきて逆に先生も生身の
人間やったんや、という感じが不思議でならな
かった。

相手のバックラインが浅かったのでここでパス
が来たらとにかく前にだけ走ろうと思って待っ
ていたら、本当に想像とおりのシチュエーションで
パスが来た。まだハーフライン近くでかなり遠
かったけれど、GKは右ポストにへばりついて左
は開いているし、相手バックスは必死で追っか
けてくるし、何より佃先生が「早よ打たんかい！ポ
ケ！」と言っているのが聞こえて（ような気がし
て）ヤケクソで打ったら硬い土のグラウンドはゴ
ロでもスピードは落ちず入った。

結局これが決勝点となり優勝できたのに試合後
に褒められるかと思ったら知らんぷりで、「い
やー、最後の2-3分は長く感じたなあ」だけ。

同じようなことは全国大会でもあって、前年優
勝校の静岡代表との試合。味方ゴール前から神戸
君（30期）がクリアした大きなボールを追っか
けている最中にこのシーンは県の決勝で入れたと
きとおんなじ、という感覚がよみがえって来て、
ここで入れたら今度は結構褒められる、と思
いながら打ったら入った。また何もいわれへんや
ろな、と思ってたらホントに何もなかった。それ
どころか歩けないほどの大怪我しているのに「ま
だ行けるやろな」。

後年、それでも誰かと会う度に「こいつは全
国大会で浜名から1点取りよったんや」と紹介
してくれるのはとても嬉しいことでした。

60になってもまだサッカーを続けられるのは
佃先生のおかげだと思っています。

29期 柳哲也

「佃せん追悼文」

メキシコ五輪で大活躍した釜本選手のようなストライカーに憧れて中二の2学期にサッカー部に転部した僕に佃せんが命じたポジションはフォワードではなくスイーパーだった。

僕の理解ではスイーパー＝リベロで、守備一辺倒ではなく、臨機応変に攻撃参加も可能な筈だが、佃せんは僕に対して敵陣深く攻め込むことは勿論、ハーフウェイラインをまたぐことすら禁じた。

対戦相手がどんなに弱くても攻撃参加を許されない僕は守備の最終ラインでじっと我慢の子、得点した仲間のガッツポーズに嫉妬し、ストレスを溜め込んでいた。

でも高三の絶頂期を迎え、漸く掃除夫としての役割が板についた僕は、徐々に、佃せんの意にかなう「忠犬ハチ公」を演じることが快感と思えるように成長した。

そんな僕のことを佃せんが信頼していたかどうか？良く分からなかったが、同期の中で、佃せんにどなられたり、追い回されたり、しばかれた回数は、何故か僕が一番少なかったと記憶している。

即ち、佃せんは個々の性格を把握し、我儘な奴が多い中で、比較的真面目に働きそうな僕のことを信頼し、スイーパーに抜擢したということか？

我田引水的だが、僕はそう理解することで、長年の苦勞が報われたような気がする。

何れにせよ、今年還暦を迎えた僕ら29期は、佃せんのお陰で、

☆素質、技量、身体能力、全ての面において他校より劣っていたが、近畿大会やインターハイという晴れ舞台を経験することができた。

☆同期の結束は頑強で、最後まで残った奴、途中で退部した奴を問わず、今でも交流が続いている。

佃せんありがとう！

盛岡在住の僕は、まだ墓参りに行ってませんが、早晚墓地を訪れ、佃せんのお墓をピッカピッカに掃除し「往年の名スイーパー健在！」をアピールさせていただきます。

29期 松崎不二雄

「佃先ママ宅での下宿」

事の始まりは、昭和46年夏のインターハイ出場決定。当時の校長シュワイツエルが佃先に「成績の悪いサッカー部の生徒の中間テストが悪かったら、インターハイに出ることは許可しない！」と言ったらしい（僕らが言われたのではないので、憶測）。

さあえらいこっちゃ！「勉強せえ！」言うてもアホどもの成績アップは期待できない。成績が上がらなければ、出場辞退もあの校長ならやりかねない。そう考えた佃先は、成績がイマイチの選抜チーム4人（辰巳、大橋、井上、松崎）を選んで、御影にある佃先のお母さんの家に中間テストまで下宿させ、息けないように管理することとした。とは言っても、アホどもだけ集まって下宿してもなんの進歩もないのは明白なので、葺合高校サッカー部監督の藤田先生（数学）に週2、3度の家庭教師をお願いし、藤田先生も快く引き受けてくださった。

一か月ちょっとの奇妙な下宿生活が終わり、中間テストの成績がどうだったかは忘れてしまったが、インターハイに出られたということは、アップしたのだろう（成績ダウンした時の佃先の顔が脳裏にちらつき結構真面目に勉強した気がする）。

その時のエピソードは長くなるので割愛するが、聞きたい方は辰巳、大橋から聞いて下さい。彼らとは、今でも飲んでる席では毎回のように話題になる強烈な思い出となっている。

佃先は「怖い」というイメージを持っている。確かに恐かったけど、この出来事を思い出すと本当に面倒見の良い熱血教師だったんだと思える。あらためて、インターハイに連れて行ってくれたうえ、ここまで面倒を見てくれた佃先に感謝。感謝。

最後に、むさくるしい高校生4人の弁当など三度の食事や、洗濯などの世話をしてくださった佃先ママ、本当にありがとうございました。

また、忙しい中、仕事が終わってから、出来の悪い4人に数学を教えてくださいました藤田先生に心より感謝いたします。

29期 津田泰三

「つくせんと第3グラウンド」

中1から高2夏までお世話になりました29期津田です。つくせんの最初の強烈な思い出は、26期の近畿大会出場(滋賀)にボール磨き要員として連れて行ってもらった遠征です。当時のボールは最後に革の紐で締めあげるタイプでドロースでテカテカになるまで磨きこんでいました。宿舎からグラウンドまで初出場の緊張のせいか、全員のピーンとした張りつめた空気が忘れられません。

あとは第3グラウンドの思い出です。いかにつくせんの眼を盗んで給水するか、夏場に斜面下の溝に顔を突っ込んでむさぼり飲んだ六甲サイダーのうまかったこと。道無き台地(現松陰)を突き進んで通ったベンガルのカレーライス。毎朝、左足のインステップが裸足で蹴れるまで通ったキックボード。阪上さん率いる山岳部だけが、何故かかっこよかった。異臭漂う弓道場裏の部室。第3は私にとって仲間たちと過ごした忘れられない聖地です。

高2の夏にけつを割ったにもかかわらずサッカー部OBとして扱っていただいたつくせんには感謝の気持ちで一杯です。同期の面々にもこの場を借りてお礼申し上げます(面と向かっては言わない)。

最後に56期の息子と姪っ子の旦那さんもつくせん(教頭時代)、市川先生、千原先生に6年間大変お世話になりました。あらためてお世話になりましたことに感謝申し上げます。ありがとうございました。

謹んでつくせんのご冥福をお祈りします。拝

31期 濱田慎豪

「写真で振り返る佃先生との思い出」

31期が中1の時の戸狩夏合宿の写真(1968年8月)



中1・中2と、中3・高1・高2・湯川さん・佃先生とに分かれている。

第一次サッカーブームで、中1・中2は30人以上が参加している。

一方、高校は26期が近畿大会出場後引退し、27期の高2が4人、28期の高1が5人しかおらず、29期の中3が10人加わって初めてチーム練習が出来るという有様であった。その中3も、中途入部者が半分を占めていた。

ここから、インターハイ初出場、近畿大会初優勝への道程がスタートした、重要な合宿である。



インターハイ兵庫県予選決勝(1971年5月)。

ハーフタイムの様子と、予選決勝に勝利し全国大会出場を決めた歓喜の表情です。

OB会長の鈴木先生、ヒルケルさん、ブランガン先生も写っています。カメラは勿論ヒルケルさんのものです。



徳島でのインターハイの様子。



鳴門総合競技場（今のポカリスエットスタジアムでしょうか）での総合開会式では、兵庫県全体の統一ユニフォームが無く、当日の服装の打ち合わせも無かったため、六甲だけがサッカーのユニフォームで入場行進し、カッコ悪かったという記憶があります。静岡県などは、ピシッとした白の体操服で、藤枝東の碓井選手なんか、カツコ良かったなあ。



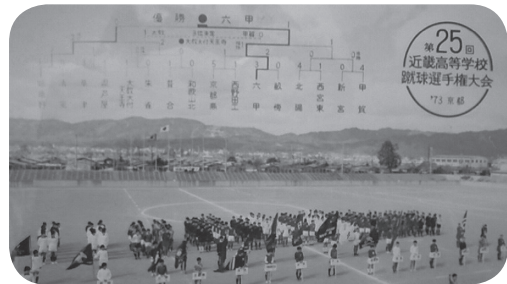
サッカー競技の開会式では、福助の下着に背番号をスプレーで吹き付けて（その吹き付け作業は我々高1がやった）作ったサブユニフォームで行進した。

1回戦の米子東戦は、そのサブユニフォームで戦い、快勝した。

2回戦は、前年優勝校の浜名が相手で、残念ながら逆転負けであったが、その後の記念写真では、何故か皆、笑顔である。佃先生も・・・



1973年3月、近畿大会の開会式の模様。



一回戦の奈良代表畝傍高校戦のハーフタイムの様子。



決勝の京都代表嵯峨野高校戦のハーフタイムの様子。



開会式・2回戦・準決勝・決勝は西京極球戯場、1回戦は西京極陸上競技場でした。

大会を通じて、たくさんのOBの方が応援に来

て下さったが、その姿に時代背景が写し出されている。



勝利し、歓喜の様子です。佃先生の胴上げの様子が写っている。



表彰式後の記念撮影での佃先生の姿が若々しいですね。



【追記】



最後の写真は、昭和43年8月の中一時代、戸狩での夏合宿で休憩の時に撮ったもの。

27期の三木先輩に頭をこづかれているのは、31期の浜田か中村か・・・

伯友の寄稿文の中で、辻先輩がこの合宿のことを「ワイワイ楽しい合宿でした」と評しておられますが、その雰囲気を感じられる一枚だと思い、追加掲載させて頂きました。

この機会に、伯友とともに、六甲学院サッカー部50年史を読み返しました。

どちらにも通ずるところとして感じたのは、佃先生の生徒達への限りない愛情…という大袈裟かも知れませんが、厳しさの裏側にある確かなもの…です。

多くの人があることに感謝していることを強く感じます。

佃先生、本当にありがとうございました。ご冥福をお祈り致します。

31期 中村英一

「ホトケノツクダ」

佃先生、長い間ありがとうございました。本当にお世話になりました。

慎んでご冥福をお祈りいたします。

思い起こしてみると、今までに私がお指導いただいた先生の中で、佃先生ほど長きに渡ってお世話になった方はありません。そもそも、中高一貫校における顧問と生徒の関係は相当特異なものだと思います。なにしろ小学生に毛の生えたくらいの中1から、青年期にさしかかる高2までの5年間ずっと熱血指導を受けたわけですから。練習は週3回でしたが、休みの日には試合があり、夏合宿では戸狩に連れて行ってもらい、総体では徳島へ、

近畿大会では滋賀への泊まりがけでの遠征というように、多くの時間を一緒に過ごさせていただきました。

高校卒業後も年1回は初蹴りでお会いすることができました。結婚後こちらに戻ってきてからは子どもも連れて参加しましたので、佃先生との関係は家族ぐるみのものとなりました。子どもたちはニコニコ顔の佃先生がくださるおもちゃやお菓子をいつも楽しみにしていました。

そのうちに二人の息子が六甲学院にご厄介になることになり、佃先生も教頭先生になられて、先生との関係には教頭先生と生徒の父兄というものが加わりました。息子のことで幾度か先生にご相談したことがありましたが、そのとき佃先生からいただいた言葉には、六甲学院という組織の枠を超えた揺るぎのない確信と慈愛が満ちており、私はどんなときでも君たちの味方ですというメッセージが込められていました。そしてそれは我々夫婦にとって大きな支えとなりました。

我々の多くがそうであるように、佃先生もまた見る角度によって様々な姿をされていた方だと思います。我々が生徒であった頃の熱血指導には否定的な一面があるかもしれません。しかし、長年に渡ってその人柄に触れてきた身として改めて振り返ってみると、これほどの誠実さと愛情に溢れた先生は稀有な存在であり、こういう先生にめぐり会うことができた自分は幸運であったと再認識しました。

先生からいただいた多大なご恩に感謝して、もう一度お礼の言葉を述べさせていただきたいと思っています。

ありがとうございました。



1999年3月22日、佃先生が六甲を退職されたお祝いの会の写真（六甲八幡神社にて）

31期 杉江一彦

「写真で振り返る佃先生の思い出」

主に六甲のOBの子息を中心として毎週日曜日の午前中にサッカースクール「六甲ヒルゲルフトボールクラブ」を開催していました。教え子の中に佃先生の息子さんの和弥君もいました。

1つ目の写真は六甲第3グラウンドのスクール中の写真でコーチは左から30期渡辺さん、32期関さん、私です。

年代は昭和50年～51年頃と記憶しています。



2つ目の写真は夏休みの信州戸狩の合宿です。コーチは32期関さんと私です。

年代は昭和52年頃でしょうか？記憶がやや薄いです。



このサッカースクールは私も渡辺さんも関さんもアルバイトをいただいており（当時の百貨店の店頭販売のバイト代の1日分くらい）我々には貴重なバイト???でした。

32期 大谷薫平

「『つべこべ言うな!』ポカーン」

佃先生とのお付き合い…よく考えると、すごく長い。私が中一の時からずっとなんだから、私の人生のほとんど大部分だ。

佃先生とは、単に学校でお会いしてご指導いただいただけでなく、中一のサッカー部の夏合宿、中三・高一のスキーなど、泊りがけの場合も何度かあったが、一番、お世話になり、ごめんどうをおかけしたのは、なんといっても私が大学四年生の夏の六甲ヒルケルのヨーロッパ遠征だろう。

そうそう、あれは1978年の夏だ。六甲ヒルケルのチーム結成から約1年がたち、みんなでヨーロッパに遠征して、向こうで試合をしようということになり、佃先生とヒルケルさんが、ヒルケルのメンバーを連れていってくださることになったのだ。

参加メンバーは、すでに社会人の先輩もいらっしやっただが、ほとんどが、分別もないし、常識もない、言うことだけが一丁前の大学生。現役高校時代なら、佃先生のビシッと一声で、全員がシュシュッと動いたものだが、「オレたち、もう卒業したもんね〜」って、言うことを、聞かない聞かない。そんな我々を、佃先生は、約2週間もの間、フランス、スイス、オーストリア、ドイツ、ベルギーと、無事引率されたのだ。

その間、佃先生のストレス・疲労が、どんどん蓄積されていったことは、想像に難くない。

そして、遠征もいよいよ終盤にさしかかったアントワープの宿の朝、その事件は起きたのだった。「さあ、今日は、アントワープの街へ行くぞ!みんな、早くバスに乗れ!」

佃先生は、皆をなんとかスムーズに出発させるべく声をかけたのだが、我々は、部屋でだらだらおしゃべりしていた。

すると部屋の扉が開いて、仁王立ちの佃先生が大きな声で、

「何やっとなんねん、はよせんかい!」

ヤバいと察知した皆はおしゃべりを切り上げて、そそくさとバスに移動したが、用意が遅れた私と34期の吉村くん(旧姓萩原くん)が、一番最後に仁王さまの前を通ることに。

そのとき、仁王さまが、一層大きな声で言った。「おい萩原、そのTシャツ、首のタグが出てるやんか。おまえ、裏返しやないかい!」

おお恐っ!!!

…なのに、吉村くんは、

「先生違うんです。このHANG TENのTシャツは、今流行っていて、こっち側が表で…」

「つべこべ言うな!」ポカーン…

後にも先にも、卒業生が殴られたのは、吉村くんだけじゃないかと思う。

もちろん、その時代、表側の首の後ろにタグがあるTシャツがちょっとだけ流行っていて、そのTシャツも、確かに吉村くんの言うとおりののだが、そんなことより、なによりも、佃先生のストレス・疲労が、ピークに達していたというのが事の真相であろう。

実は、その日の昼、傷心の吉村くんを慰めつつ、アントワープの街を歩いていて、今度は、私が、急にお腹が痛くなって動けなくなってしまった。(それが盲腸炎だったと帰国後判明)

そうなると、また、迷惑をかけてしまうのは、結局は佃先生。

佃先生に、現地の先輩と連絡をとっていただき、私は、チームがベルギーにいる間ずっと入院することに。さすがに、佃先生も、「馬鹿野郎」とは言わずに、「大丈夫か」とやさしく心配してくれたのだが、今になって考えると、「馬鹿野郎」のほうが正しいかもしれない。

帰国して、母親に、「たいへんだったよ、盲腸炎にもなるし」と報告したら、母親に言われた。

「馬鹿ねえ、いちばんたいへんだったのは佃先生よ」

そのとおり!そのとおり!!

本来ならば、我々卒業生が、旅行の企画をすべて行い、佃先生やヒルケルさんをご招待すべきであった…と。

32期 関浩之

「佃先生を惚んで」

先生とは小学校5年生のときに初めてお会いしました。当時住んでいた芦屋に初めて少年サッカースクールなるものができ、私が生徒として、先生はコーチとしての出会いでした。その時の先生はいつもニコニコ、ご自身も楽しそうに子供達にサッカーを教えておられたという印象が残っています。私も2年後、六甲中学に入学すること

になるなど思いもせず、なんか面白いおっさんやなぁと思いつつ、ただ楽しくボールを蹴っていました。

六中に入學し、今度はサッカー部監督として教えていただきましたが、小学生時代の印象とは一変、やはり「怖い先生」でした。そのギャップには正直驚きました。ただ、先生の体調がすぐれなかった時期もあり、練習、試合に来られなかったときも多かったように思います。それでも、先生が来られたときのあの緊張感は忘れられません。(決して先生がおられないときはいい加減な練習をしていた訳ではありませんが。)

私も他のOBの方々と同様に、かなりどつつかれましたが、今考えると、それなりの理由があったんだと思います。練習態度等々が良くなかった、先生のご指導通りにできなかった、といった直接的な理由はもちろんですが、やはりサッカー、また部活動というものにどう臨むか、おおげさに言えば、中学、高校生としてどう生きていくか、といったことを教えていただいたような気がします。今になって気づいても遅いのですが。

高校を卒業してからも、六甲ヒルケルFCの小学生チームで、私がコーチとして、先生は総監督としてお付き合いいただきました。この時は、やはりいつもニコニコのやさしいおっちゃんでした。

こう思い出してくると、先生には20数年にわたり、サッカーというスポーツを通じて直接、いろいろなことを学ばせていただきました。あるときは「鬼の佃」またあるときは「仏の佃」、でも先生の心の底にあったのは、「こいつらをしっかりした人間に育てたい」という人間教育だったんだろうと思っています。感謝の言葉しかありません。

先生は私の「人生の恩師」です。

これからもずっと我々をお見守りください。本当にありがとうございました。

ご冥福をお祈りします。

33期 中田高志

「佃先生を偲ぶ」

まさかこんなに早く佃先生の訃報に接するとは思いませんでした。まだ76歳というお年は早すぎです。残念です。

最後にお会いしたのは4年くらい前の初蹴りでしょうか。晩年の先生はとても柔かな印象でしたね。

在学時代の先生は鬼のツクダと六甲生に恐れられ、また、教え子であるサッカー部の我々にとっても怖い存在でした。しかし、卒業してから先生にお会いすると、在学時代の熱血指導が、深慮遠謀から出たものであったことがよくわかりました。

私たちの学年は、OBチームである、六甲ヒルケルフットボールクラブの創設メンバーの一番下の学年です。卒業してすぐヒルケルクラブを作ることになった我々は毎土曜日学校を訪ね、現役高校生のチームと一緒に練習や練習試合をさせていただき、技術と体力の維持向上を図らせてもらいました。そしてそこにはいつも在学時代とは違う柔かな先生がいらっやいました。

我々33期は、六甲の最も強かった時代のひとつの山のその一番裾にいた学年ではないでしょうか。高校の新人戦は近畿大会に行くのが常連で、前年には近畿大会優勝を果たしたその年に、ゴールキーパーの私のチョンポによって県のベスト8で敗れてしまい、32期の関先輩を一人で優勝旗を返しに行ってもらった羽目にしてしまいました。そして、その後、やっと9年後に再び新人戦の近畿大会に出場することが出来たのでした。

それにしても六甲のサッカー部は強かったと思います。しかも、それは、週に3日しか練習日がないことを考えると尚更凄いことだと思います。

それはひとえに佃先生の指導の賜物だと思います。練習のない日にはサーキットトレーニングを課されました。また、練習日の終りにはインターバルランのトレーニングをさせられました。とてもしんどいものでしたが、次第に我々の体力は確実に上がって行きました。

六甲の戦術は先進的なものだったと思います。陣形はバックラインを上げてコンパクトに構え、センター攻撃では、トライアングルパスやワンタッチでの繋ぎを重視し、サイド攻撃ではオープンスペースへの走りこみを狙い、また、詰まった時にはサイドチェンジを常に心がけました。そし

て、守備では最後尾にスーパーを配し、常にラインコントロールによるオフサイドトラップの管理と抜かれた時のカバーリングに備えました。フィジカルでは劣る我々でしたが、勝ち進むことができたのはすべて佃先生の戦術指導の成果だと思います。

また、初蹴大会は六甲サッカー部の伝統の継承と結束の源泉だと思います。正月の二日に、現役の中学一年生から還暦を超す祖父のような大先輩までが一堂に会してサッカーボールを蹴ることはなかなか出来ないイベントだと思います。それを50年も続けることなど滅多に出来ることはありません。その確固たる礎を築いて下さったのは将に佃先生だったと思います。

佃先生、本当にありがとうございました。

佃先生が六甲に、そしてサッカー部に築いて下さった業績は、燦然と輝き、そして永遠に不滅です。

佃先生、神のみもとでどうぞ安らかにお過ごし下さい。そして、六甲を、サッカー部をお見守り下さい。

35期 寺井淳治

非常に強い学年があれば、弱い学年もあるのが高校のクラブ活動だと思いますが、私たち35期は、決して強い学年ではありませんでした。卒業時、5名しかおらず、34期、36期に助けられた学年でした。佃先生の指導も大変だったと思います。5名の進路もいろいろで、普通に大学からサラリーマンや医師になったのが、2名だけで、神父さんになったもの1名、ロックミュージシャンになったもの1名、そして、ただただ、病気療養をしていて、数年で死にそうな卒業生が、1名という学年でした。神父さんになった卒業生が、神学部に進学する際、先生が私に電話してくれました。

「寺井、やっぱり神様っておられるな」

「何ですか」

「あの英ちゃんが神父様になるの知ってるか」

といった具合でしたし、ロックで食べていけるようになった橋本君については、在校中散々、反対されていた先生が、すごく高く評価されていて、卒業後、30歳になったころに、素晴らしい、よかったですと話されていたことを思い出します。私につい

ては、10年の闘病の末、あやしい職業につきましたが、食べていけるだけよかったな、と言われたこともありました。

35期のお荷物でした私ですが、結婚後、鶴甲に移り住んだため、サッカー部OB会の会計も佃先生に頼まれ、今に至っております。先生、同期、そして、私を知っている先輩後輩の皆様には、ご心配をかけた至らぬOBでした。

今しばらく、会計をさせていただき、お役にたてればと思うところでございます。

佃先生、本当にありがとうございました。

35期 泥克信

「佃先生の思い出」

佃先生との最初の出会いは、小学校5年生の時(11才、42年前)、芦屋市の主催する少年サッカー教室に通い始めた時になります。そのサッカー教室には32期の関さんがお父さんと一緒に教えにきていました。

当時、佃先生は六甲でバリバリの時期で、29期の先輩方が全国大会に出場する時期だったかと思いますが、少年サッカーではすごく優しい先生だったと記憶しています。当時は佃先生が六甲の先生とは知らず、六甲中学の入学試験の体育でドッジボールがあった時に、初めて知ったかと思えます。

六甲学院に入学した後は、サッカー部に入るように言われ、そのまま入部しました。その後の6年間は、諸先輩方と同じく厳しく、親身に接して頂きましたので割愛します。

六甲卒業後は大学で東京でしたが、就職と共に関西に帰ってきて、佃先生主催の少年サッカー教室のコーチを数年させて貰いました。

結婚後は暫く米国駐在でしたが、32才の時に大阪勤務となり、子供3人を連れて六甲のサッカー部の練習を見に行ったとき、佃先生が子供達を庭園めぐりに連れて行ってくれました。今振り返れば、佃先生はサッカーを通じて小さい子供達に多くのことを教えられていたのだと思います。

聖マリアンナ幼稚園の園長先生をされていたときも、幼稚園児にサッカーを教えられています、すごく楽しそうに話しておられました。

最後にお会いしたのは、亡くなられる数年前、

大阪市内にある関西サッカー協会の事務所の近くで道に迷われているときだったと思います。もうお会いできないのは寂しい限りですが、佃先生から言われた多くの言葉を大切にしていきたいと思っています。

38期 千原勝（六甲サッカー部顧問）

「佃先生」

六甲に入学してクラブを決めるとき、野球少年だった私は迷った。六甲には硬式野球部がなく、甲子園への道はないのに野球を続けるのかどうかを。当時1歳上の兄がサッカー部に所属しており、常々「監督が厳しい」ということをきいていた。中学高校のクラブ活動は厳しいところで自分を鍛えたいという思いがあったため、私は最終的にサッカー部を選んだ。が、すぐに大変なところに入ってしまったことに後悔する。（これは皆さんも同じでしょう）ただ、やめるということは考えなかった。（これも皆さんも同じでしょう）これが、私が佃先生に出会ったきっかけである。

運が悪いことに私が住んでいるところは佃先生と同じ鶴甲で、度々一緒に帰る羽目になってしまった。当然一緒に帰りたくないでグランドキャニオン（現松蔭女子大）の所で一定の距離を開けるのだが、悪友たちが佃先生に聞こえるように「千原！バイバ～イ！」と叫ぶものだから、佃先生は立ち止まり私が来るのを待っているのである。恐怖の時間である。しかし、そこでの話の内容の多くは私の叔父の話であった。私の叔父は佃先生と同期で、しかもサッカー部であった。よく叔父さんの家に遊びに行ったこと、悪さをして一緒に怒られたこと等楽しそうに話された。ここにも佃先生と私にはつながりがあった。恐怖の時間は意外に恐怖ではなかった。

卒業してからは初蹴りでお会いするぐらいだったが、神奈川のサレジオ学院に就職して9年目の夏に突然電話をいただいた。最初は何の電話かわからずただ緊張していたが、数学の教員に空きができたので帰ってくる気は無いかということだった。最初は、サレジオで充実した生活を送っており、サッカー部も軌道に乗っていたのでお断りをしようとしたが、現在のサッカー部の状況をきいて考えが変わった。佃先生は教頭になられ、

サッカー部は市川先生と素人の先生がみているとのこと。自分がつくりつつあるサレジオのサッカー部を去るのは本当に心残りであったが、伝統ある六甲のサッカー部を佃先生の後を受け継ぎ育てていきたいという大それた思いの方が強く、六甲にお世話になることにした。今、私が夢でもあった六甲で仕事をすることができているのも、このとき一生徒にすぎない私を覚えて声を掛けて下さったおかげであると感謝している。

就任当初のクラブ活動の指導は、佃先生の目を気にしてかなりの緊張があった。こんな練習をさせて大丈夫か、生徒の時のように放送で怒られまいか等、選手には偉そうにしていたが内心ビクビクであった。しかし、佃先生はクラブ活動については私のやり方に一切口出しをせずについて下さった。歯がゆい思いをされていたのではなかったかと、ただただ申し訳なく思っている。

三十を過ぎても独身だった私が昼食を適当な弁当で済ませているのを見て、実家の母に「弁当を作ってあげて下さい」と声を掛けて下さった。毎朝、鶴甲に寄ってから出勤になったが、十数年ぶりに母の弁当を食べられたこと、私の健康のことを気遣っていただいたことに感謝している。

このように、部活動や体育の授業のときしか関わっていない人にはわからない、佃先生の優しさや思いやりに私はたくさん触れることができた。佃先生は、このような優しさや思いやりを持っていながら、生徒のためになると思われたことは、いくら反発が強くてもご自分の意志を曲げずに指導されてきた。その強さを私も見習って身につけていかなくてはならない。

生徒の時は怖く、怒られたときに反発心を覚えたこともあったが、私は佃先生が顧問でいて下さったことが自慢である。佃先生の恐ろしさや先生に対しての不満を話していたのは、実はその中で自分たちは頑張っているという自尊心と、ここまですごい先生にこれだけ愛情を注がれているという満足感を、言葉を換えて話していたのだろう。（OBが集まれば、自分の代はどれだけ佃先生に指導を受けたのかという「いじめられ自慢」の話が花を咲かすのだが、これも同じ感覚だと思えてならない）

私にとって佃先生は六甲そのものであり、いろいろな立場で関わられたことが自慢であり誇りである。そのあこがれの佃先生が私を選んでサッカー部を託して下さったにもかかわらず、私の未熟さ故、先生が満足して下さるような結果を残せてい

ないことは本当に申し訳なく思っている。佃先生がサッカー部に残して下さった数多くの栄光にはとても及ばないが、私なりに努力してサッカー部を大きく発展させていき、そのことで先生に少しでも恩返しができればと思っている。

39期 中野操

『佃先生を偲ぶ会』に寄せて」

野球少年であった私が六甲中学に入学して最初に落胆したことは、高校に硬式野球部がないことでした。甲子園への憧れを諦め、母親の勧めもあって「鬼の佃」率いるサッカー部への入部を決心したのです。この些細な決心が、これほどまでに自分の人生に影響を与えるなどという事は、その時には全く想像もしていませんでした。

サッカーは不思議なスポーツだと思います。単純ながら奥深く、50歳になっても童心に戻ることが出来る。素晴らしい仲間との絆も持ち続けられる。このような機会を自分の人生に与えて頂いた先生に本当に感謝しています。人生をサッカーに、又、教師として捧げられた先生とめぐり合えた事が自分の人生の最大の幸せです。感謝。

41期 本多克己

「佃先生に教えられたこと」

六甲のサッカー部OBチームである六甲ヒルケルは創設以来30年以上の歴史を積み重ね、近年には40歳以上のシニアチームも設立されて神戸市や芦屋市のリーグに所属して活発な活動を続けている。和気あいあいとしたムード重視であったり、試合後の一杯目当てというチームも多い中で、ヒルケルは勝つことを優先して参戦し続けている。

スポーツの本質はそもそも「楽しむ」ことであるが、その楽しみのなかでも、特に団体競技においては仲間と力を合わせ、勝負に挑むこと、勝つために力を尽くすことは最大の楽しみである。佃先生がサッカー部において目指したものは、まさに勝利であり、勝つことの楽しみであったと思う。

中学の時、市民大会と総体を連覇した時、先生

に喜んでもらえたことは忘れがたい思い出となっている。高校では新人戦県大会で優勝することができたが、試合前週の練習の最後に「勝つために食べる、勝つために寝る、勝つために、、、」と発破を掛けられて感激したことも忘れがたい。自分たちはそんな先生のああ勝つために全力を尽くすという姿勢に育てられたように思う。もちろん負けることもあるし、勝つために他のことを犠牲にしてというようなことではなく、目標に向けてやってはいけないことはやらない、やれることはやりきる、それも徹底してやりきるということに刻み付けられたように感じる。

昨年で20周年を迎えた姉妹校とのOB対抗戦での1シーン。「対戦相手との親睦や年齢のバランス」を考慮して先生自身も出場されていたのだが、ひとたびチームが劣勢となれば、ベンチで控えていた、まだ大学生だったころの私を「本多行け!」と送り出し、敗色濃厚となれば現役時代と変わらない鬼の形相を見せていた(さすがに蹴られたり、石を投げられたりはしなかったけど)。この対抗戦が20年以上も継続していることの一つの理由は各校に「勝ちたい」という思いがあり、若手から中高年までが世代を超えてその思いのもとにひとつになれることだと思う。

卒業してからは協会の会合やスタジアムで顔を合わせるたびに「お前たちは週3回の練習でよく優勝したな」と声をかけていただいた。そんな時、試合前に公共要理を休んで練習に参加して厳しく叱られたことを思い出した。先生のなかでは、勉強もして、公共要理にも参加して、生徒としてしっかり生活しながら全力を尽させることを目指しておられたのだと改めて身にしみた。

先日、中学のサッカー部の練習試合を見る機会があった。夏休みの猛暑のなか、監督の千原さんがまだ幼さの残る生徒たちに厳しい声をかけておられた。生徒たちは真っ黒に日焼けした顔でそれに応え、力を振り絞ってボールを追いかけていた。やけに懐かしい思いとともに、自分たちがどのように育てられたのかと思いを馳せた。

41 期 山本雅彦

「佃先生と過ごした日々」

佃先生のことを初めて知ったのは小学校5年生の時だった。

まだ、創設間もない神戸FCでサッカー漬けだったころ、母親から「中学受験すべき！」との強い指導があるなか、受験かサッカーを続けるかで悩んでいた時に聞かされたのが「六甲の佃先生」のことだった。

「六甲に行けば、中高6年間好きなサッカーを有名な指導者である佃先生に指導してもらえるのだから今は我慢しなさい！」というものだった。

まだまだ子供だった自分はその言葉に踊らされ、スッパリと？神戸FCをやめ、1年間勉強をやっ、て、小学校の先生からは合格の可能性は半々といわれていたが、見事なんとか合格し、無事六甲中学に入学し夢だったサッカー漬けの日々を堪能できたのだが、そこで、佃先生！

聞いていた通り素晴らしい指導者ではあったが、入学後の耳にする評判は「怖いでえ〜」というものだった。

そうはいつでも、入学した当時は全くそのような怖い思いはしなかったのが・・・徐々に・・・時間がたつと、何度か「その怖さ」を思い知らされる場面があった。

なかでも中学3年くらいの暑い夏休み中の練習試合、第3運動場で何試合かしてもう疲れてこれ以上走れないというとき、先生に呼ばれて、正座させられ「何をやっどんや！」と怒られ「のどが渴いてももう走れませんと」言ったら「それだったらそこの水飲め！！」と溝の水を差して言われ、「飲めませんと」と「このくらいの水も飲めんと根性なし！」と言われ、空気入れを投げつけられたときは（幸い体には当たらなかった！）本当に怖かった。

しかし、本当に怖かった記憶はそれくらいで、あとは怖いというより「怒らせると面倒やなあ」と思うことが何回かあった。

その最たることが、怒ると第二運動場から次々とボールを第3運動場に向かって蹴って、そのボールを拾いにいかなければならなかったことだ。

それだけでなく時間も短い貴重な練習時間がボール拾いだけで終わってしまうことが何度かあった。今では本当に良い思い出となっている。

私にとって、このようなちょっと怖い面、面倒

くさい面はあったが、それらとは正反対の時折見せていただいたあの何とも言えない嬉しそうな愛嬌のある顔（めがねの奥の目が一本の線になるような）は今でも目に焼き付いている。

先生の考えてらっしゃるレベルのプレーができたときは本当に喜んでくれ、その愛嬌のある笑顔で「やいと！それでええんや！」と言われるのが嬉しくてプレーしていた部分もあったかなと思う。

あと、6年間の試合の中で最も記憶に残っているのが、高校1年の春、初めて近畿大会に出場した時の試合だ。

1回戦は清風！本並（のちにガンバのGK）や上永谷とかがいる強豪だが、今の自分たちだったら勝てるのではないかと思い、非常に楽しみにしていた試合だった。しかし、初めての近畿大会ということで少し意気込みすぎていたのか、周りを見回す余裕を失っていたのか、大会本部への挨拶もろくにせず「さあ練習！」と行きかけたところ、佃先生から「ちょっと待て！お前ら大会本部に挨拶したか？そんな基礎的なことができん奴らは試合する資格ない！この試合は棄権だ！」といわれてしまった。全員正座して佃先生に謝り、自分たちを見つめなおした後に、何とか試合はさせてもらったが、やはりというか浮き足立っていた六甲はあっけなく1回戦で敗退してしまった。

初めての大きな大会で、それも大阪の強豪との試合を前に浮ついていた我々に対し、このまま試合に入ってしまったら「まずい」と思われ、喝を入れていただいたのだと思う。

兵庫県で優勝して臨んだ近畿大会だったので、何とか良い成績を残し、先生に喜んでもらおうと意気込んでいただけに、浮ついた気持ちを最後まで修正できずに試合をしてしまったこと、弱気なスタンスで試合に臨んでしまった自分のことを今でも情けなく思っている。常にいつもの自分を出せることのむずかしさ・大切さを思い知らされた試合だった。

本当にいろいろな経験をさせていただいた中学高校の6年間、先生に乗せられ（乗せていただき）、自分自身、サッカーも人間としても勉強させていただき、成長させていただき、本当に充実した時間を過ごすことができたのも、「六甲の佃先生」とお会いできたおかげだと思っている。

本当に恵まれた環境で、恵まれた同期・上下年代のメンバーとともにサッカーができ、そしてその素晴らしいメンバーで神戸市・兵庫県で優勝できたのも佃先生の指導の賜物だと思う。

また、個人的には、兵庫県選抜の一員として佃先生とともに1982年島根国体に出場させてもらえ、なおかつ「国体優勝」という貴重な経験させてもらったことは、自分の人生の中でも大きな忘れがたい勲章の一つとなっている。

また、卒業後にはわが夫婦の仲人としても大変お世話になりました。

本当にお世話になり、ありがとうございました。

佃先生と過ごした日々は今でも鮮やかに、そして輝いて思い出される本当に大切な日々であった。

42期 松下治正

「恩師・佃先生」

「集合!!!」中1の9月、体育祭に向けての総行進練習中、第三グラウンドに響き渡った佃先生の号令が、その後の私の人生に大きな影響を与えた。

その頃野球部でピッチャー志望だった私は、2学期から入ってきた同期がすぐにピッチング練習をさせてもらっていたことで、やりきれなさから野球への魅力が薄れ始め、また夏休みの体育の宿題として観戦したワールドユースでサッカーの魅力を感じ始めていた。そんな時だったからか、場が一気にピリッと引き締まったあの号令は、私を「この先生のクラブでサッカーをしてみたい」と思わせた。

野球部の退部届とサッカー部への転部届を担任の先生に渡したところ「お前、気は確かか？あの怖いツクセンのサッカー部に…大丈夫か？」と確認されたのは未だに忘れられない。

以後、名誉と言うべきなのか…同期の中では最も怒られた一人となった。

先生の指導に理不尽さを感じることもあった。高2の時に同期のメンバーが集まってサッカー部を辞めるかどうかを話し合ったこともあった…「ツクセンが嫌でサッカーを辞めるのは悔しいやんけ」というのが結論だった。厳しさがあったからこそ団結したし、気持ちも強くなれた気がする。

火事場の馬鹿力じゃないが、雨のあとの第2グラウンドを、普通なら動くはずもないほど重いL型鋼で組んだグラウンド整備器を一人で引っ張る経験をしたのも、後から追いかけてくるツクセンの恐怖がなければあり得なかった。

そんなに恐ろしい先生が、時々とても愉快で、お茶目な一面を見せてくれた。いくつかエピソードを紹介すると…

下校時に坂の途中から阪急六甲まで僕たちに笑い話をしてくれた…

「お前ら、臭いチーズを喰ったことあるか？ある外国人が日本に来た時に、新幹線で東京から大阪に来る道中、駅弁だと思ってわさび漬を買ったらしい。フタを開けたら強烈な臭いがしたが、『これは日本のチーズに違いない』と思って、大阪に着くまでに汗びっしょりになりながらも全部食べたらしいで！（爆）」

42期の山岡（あだ名：おばん）は残念ながら俊足ではなかった。彼が走っているのを見て「おばん！なに一生懸命歩いとんねん！」…（いやいや走ってます）

3対2の練習をしていた時に私のミスを怒ろうと思って拳を振り上げながら近づいてきたツクセン。怖いから目を瞑って我慢しようとしたら、いつになっても拳が落ちてこない。恐る恐る目を開けたら、私の足下でひっくり返っておられた。殴るフェイントをかけて蹴ろうとした時に、私の足下にあったボールに乗かってしまって転ばれたようだ…吹き出しそうになりながらも堪えられたのは奇跡。

卒業後、サッカー部のOBチーム”六甲ヒルケル”に参加して数年間マネージャーを務め、多くの先輩、後輩にサッカーを通して知り合った。勤めていた父の会社の倒産後、宿命を失って迷走していた私に、サッカー部の先輩が声をかけてくださったことから今の生業がある。現在も本多さん（41期）の会社と運営しているセレッソ大阪モバイルサイトの仕事や、神戸市サッカー協会の理事（ボランティア）など、公私ともにサッカーと関わっている。

10年ほど前、何かの会の後で佃先生と二人で歩きながらお話をさせていただいた際に「俺は周りの人に活かされている」ということを仰ったのを覚えている。佃先生が自分と同じ事を感じていることで、失礼ながら先生と生徒の距離から、人と人の距離に縮まった気がした。

佃先生は自分にとってまさに“恩師”そのもの。天に召された後も、先生にいただいた永遠なるものは私の中に生きている。

43期 宮崎道夫

「佃先生と過ごしたあの頃」

つるはしを振りかざしグラウンドで感情を爆発させる、がむしゃらで真摯な怒りの影、未熟者たちに本気で何かを伝えるために。六甲ではお馴染のツクセンのパフォーマンス。

中学、高校のサッカー部の恩師である佃幹夫先生、これまでの人生を振り返ってみても、先生ほど感情をストレートにだして接して下さった方はいなかった。

我々43期がお世話になった1980年～86年、中三ではW杯スペイン大会のテレビ中継に囁り付きロシアやブラジルカルテット等、世界を知ったあの頃、この機会に当時生活の中心だったサッカー関係の出来事の記憶の断片をたどりたい。

中一の時はただひたすらがむしゃらに当時のエースだったヤイトーさんを筆頭とする諸先輩方との一対一に明け暮れた。技術も理論もなく、裏を取られことごとく予測に反し重心の逆を突かれ追いかけて廻すことが無限に楽しかった。腰を残し、スライディングで奪い取るまでどれ程の時間を費やしたか。でも六甲は中高一貫の合同練習が土曜日にあったから、その後何度もリベンジのチャンスは巡ってきた。毎週少しでも上の学年の先輩方との試合に交じりたい、胸を借り自分の力を試したいと先生の方を窺っていた気がする。

何よりも今ほど情報に溢れていなかった当時、神戸はサッカーの世界を覗くのに絶好の場所であり、普段の練習や公式戦以外も先生のおかげで様々な経験を培った。

中二のある日、急遽第三グラウンドで組まれた練習試合の対戦相手はなんと当時の日本代表女子サッカーチームでFC高槻等の高校生主体の選手と試合をした記憶がある。後日、御崎競技場(神戸中央)に足を運び応援したのは、ポートピア81国際親善試合で結果は残念ながら大敗だったと思う。あのなでしこ優勝の30年前の歴史の一コマ。

この御崎には、ワシントン・ディプロマッツやボカ・ジュニアーズが来日した際もツクセン or イチセンに引率してもらい、クライフやマラドーナを応援した自分がいたはずだ。

43期の戦果としては中3の私学大会優勝くらいしか思い浮かばないが、関学、甲陽、甲南を打ち負かしたはずの記憶よりも、常にベスト16

ら辺で、赤塚山に、御影に、八代に、明北に、伊丹北に負けた試合の悔しさの方が不思議と思いついて深い。

そして顧問の先生方は家族よりもずっと近くでそのすべてを見守っていて下さったのだと改めて思う。最大、上下38～48期まで10学年の自身の繋がりと記憶の一コマに甦る数々の味方ゴールの歓喜の瞬間や、失点後の辛いキックオフ等を鑑みる時、先生はその何倍もの時空にて、喜びもそして悔しさも様々な形で皆と共有して下さったのだと思う。

そして卒業後の披露宴でのスピーチ、毎年の年賀状等、本当に有難うございました。

先生、男子日本代表がベスト8を突破するのはいつでしょうか、東京オリンピックも楽しみです。最近はお父さんコーチやフットサル等で汗を流すことも遠ざかっていますが、諸先輩のように健康を維持してもっともっとこれからは何かしらサッカーに関わって行けたらと感じる今日この頃です。

初蹴りで集まった時に染みるセンス溢れる六甲サッカーの創始者たる佃先生、誰よりも素晴らしい愛情をもって若き日の僕らに接して下さい本当にありがとうございました。

厳しさの眼鏡の奥に潜む優しい眼差しを偲びつつ、ご冥福をお祈りいたします。

43期 高橋邦彦

多分43期では私が一番かわいがられたと思います。

ツクセンの思い出と言えば・・・

- 1) グーバンチ
- 2) 今言ったら大変な事になる罵倒する言葉…脳膜炎・日本脳炎
- 3) 雨の中の練習での水たまりへの背負い投げ
- 4) ドクターバックをオモイクソほられた事
- 5) スパイクで思いっきり殴られて頭がボコボコになった事
- 6) 失敗して上向いたら「天井(空やったかなあ)に何か書いとんのかあああああ」と言われた事
- 7) 土曜日の練習の時に姿が見えた時のあの心境
- 8) 今日は出張でおらんと先輩から聞かされとって、急に来た時のみんなのあの雰囲気
- 9) 逆に練習の時ツクセンが急に帰った時のあの

安堵感

10) ボールを相手から奪う時の手の使い方…これは少年サッカーの指導をしています、同じ事を教えている

11) 千本シュート

まだまだあると思うが、瞬間的にこっだけ思い出した。

私の六甲での生活の全てとまでは言いませんが、大部分を占めていたなあと思うつくづつく思います。

あのツクセンも亡くなるんや…

今、私には子供（男は中2と小4／女の子もいる高2）が3人います。

特に2人の男共には当然サッカーをさせています。彼等には、私が佃先生に教えて頂いた事を全て教えています。

また小4の方はチームの指導もしていますが、チームの連中にも同じ事を教えています。

30年前に教えて頂いた事は、現在でも通用する事が非常に多く、共感を持たれる事も多々あります。

そのたびに、怒鳴られた事、しばかれた事、黒い顔が脳裏をかすめると共に佃先生への感謝の気持ちも湧いてきます。

夏の私もツクセンに負けんくらい真っ黒な顔です。

あんなに黒くなれるものかと思いきや…なれるもんです。

でも私の場合は夏だけです。

ツクセンは年中だったと記憶しています。

ズケと物を言ってしまう。佃先生から教えるを受けて育ったせいだ。嫌われたとしても言わなければならないことは言うべきだと思っているからだ。

佃先生はよく怒鳴った。私も今、ときに怒鳴る。佃先生から教えるを受けて育ったせいだ。本気に見えて、本当は本気でない怒り方を習った。

佃先生は厳しい人だった。今、仕事のなかで、依頼者から怖いと言われることがままある。後輩にも怖いと言われる。優しさを前面に押し出す人には警戒してしまう。全部、佃先生から教えるを受けて育ったせいだ。でも、佃先生が珍しく見せる笑った顔は優しかった。

佃先生は指笛が上手かった。私も今、指笛が吹ける。佃先生から教えるを受けて育ったせいだ。珍しがられてよい。

佃先生には大事なことを教わった。大学でのエピソードを聞いた。できるかどうかはわからなければ、できますと言うな、努力しますと言えど。結果ではなく、努力する過程こそ大事だということも伝えたかったのだと思う。努力しても結果が出るかどうかはわからない。でも、努力しないと結果は出ない。今、そういうことだと理解している。

私は、昔風の人間だ。佃先生から教えるを受けて育ったせいだ。若い人を見ると時代に取り残されている感がある。でも、それはそれでよい。

佃先生は、私にとって、六甲という学校そのものだった。

46期 入江進

間違いなく人生で一番影響を受けた人です。在校生の間は気付きませんでした。卒業して歳を重ねるたびに、先生の情熱と愛情の大きさをヒシヒシと感じます。先生のようなサッカーを人を愛する人生を送りたいと思う毎日です。

44期 鈴木一郎

「薫陶」

佃先生にはよく怒られた。理不尽にも思えた。今、後輩を怒っても、言葉を尽くして教えることはしない。佃先生から教えるを受けて育ったせいだ。考えてほしいからだ。

佃先生はお洒落を嫌った。だから今、服にはちょっとだけしか気をつかわない。おべんちゃらも言わない。佃先生から教えるを受けて育ったせいだ。虚飾を排し、中身・内容を重視すべきと思うからだ。

佃先生を嫌う人もいる。今、私も人から嫌われている部類だろう。おべんちゃらを言わず、ズケ

46期 伊井秀夫

佃先生のご冥福をお祈り申し上げます。

我々の期は先輩方と比べると弱い時代でしたので、よく佃先生に怒られたことを昨日のように思い出します。

心からご冥福をお祈りいたします。

49期 小林紀方

「最後の思い出のなかに」

ここに写るのは小学1年（現在小学5年生）の息子です。



私の記憶のなかでは、この場面の中に先生がおられます。

建て変わる前の校舎。その年の初蹴りに初めて息子を連れて参加した私は、外の寒さを離れて部屋からグラウンドを眺めておられる先生に年始の挨拶をしていました。

黒板とチョークを見つけた息子が、その時覚えている限りの漢字を横一列に書くのをご覧になり「たくさん書けるなあ」と笑顔でおっしゃってくださったことをとても覚えています。褒められた記憶があまりない私は、なんとなく褒められたような気がして嬉しく思ったことを覚えています。在校時も含め多くの思い出がありますが、先生との最後の思い出のなかに息子がいることに幸せを感じます。

ただ、この部屋の床に目を転じれば埃がたまり、およそ六甲の教室とは思えない姿を憂う先生のことばも思い出されます。六甲を愛しサッカーを愛した先生からは多くのことを教わりましたが、人生においてボールを蹴るその足元はしっかりしているのかを考えさせられる最後の思い出の一枚でもあるのです。

49期 都倉良太

「苦い思い出と嬉しい思い出」

私はゴールキーパーだったのですが、佃先生に関して苦い思い出と嬉しい思い出をひとつずつ書かせて頂きます。

（苦い思い出）

確か5対抗の試合で、なんでもないバックパスを足でトラップミスした為、失点。

その後、ひたすらゴロをしゃがんでキャッチする練習を暫くの間させられました。

（嬉しい思い出）

どこの試合だったか忘れてましたが、何かとキーパーが目立つ試合で、結局試合内容が散々だったという罰で全員暫く歩いて帰らされたのですが、歩きながら「お前頑張ったからユニフォームやる」と言われ、半信半疑ながら次の練習で先生に会った時に、本当にキーパーの上のユニフォームを貰いました。

それからは、それが私の公式試合におけるユニフォームに定着しました。

卒業し、その後は東京を中心に生活していましたので、結局先生とは年賀状で挨拶するぐらいしか出来ておらず、突然の訃報を聞いたときはショックでした。

ご冥福をお祈り申し上げます。

49期 渡邊三郎

「佃先生を偲ぶ」

私は3人兄弟で、兄2人と私の全員がサッカー部で佃先生にお世話になりました。

今でも兄弟で佃先生の話をするがあります。

もちろん、各々の佃先生の思い出は異なりますが、厳しい指導を受けつつも思いやりを感じていたことは同じです。

本当に、サッカー部で佃先生から様々な大切なことをおしえていただいたことを幸せに思います。

心から佃先生のご冥福をお祈りします。

51期 酒井伊織

佃先生は教頭になられたタイミングで監督を退任されたため、我々51期は先生がサッカー部の監督をされた最後の学年となりました。高校3年の選手権予選途中であった我々には何の説明もなく辞められたことに対して納得のいかなかったことを覚えています。

退任後、先生は試合会場にこっそりこられ、試合中の我々の写真を撮ってくださっていました。

卒業前にその写真を手渡された時、先生の深い愛情を感じました。

深い愛情に根ざした厳しい指導、これからも我々の心の中に生き続けることだろうと思います。

佃先生、どうか安らかにお眠り下さい。

53期 忍海邊哲弘

佃先生は本当に怖かった。

部活があればほぼ毎日、どつかれていた。

殴られるというよりも、どつくという響きが一番合う気がする。

でも何故か、それが純粹な指導・コミュニケーションに感じられた。

最近話題になっている暴力とは全く違うものだった。

もしかすると、指導を受けた3年間であまりにもどつかれ過ぎて、慣れてしまっただけかもしれない。諸先輩方にこんなに我々には怖いのに、「丸くなった。昔はもっと怖かった」と聞かされ続けたせいかもしれない。

私が所属する53期サッカー部は中学1年から3年までを佃先生の指導のもと過ごした。決して上手いチームではなかったが佃先生の教えをひたすら守り、頑張ったチームだったと思う。一つ一つ思い出を書き綴ると、何枚紙面があっても足りないので取り分け今、強烈に思い出すエピソードをこの寄稿によせたい。

私達の練習は漫画だった。シュートを打つのは気合いであるから始まり、その気合いを声に出してシュートを打てというのである。初めは皆、意味はわからないし、小っ恥ずかしいので、小さな声を出してシュート練習をした。案の定、ボールを拾って戻ってきたら佃先生にどつかれる。余りの皆の不甲斐なさに佃先生自ら「いけー」と叫び

ながら豪快なシュートを決める。皆、要領がわかったのか、はたまたどつかれたくないだけなのか、「シュートー」「入れー」などなど、大声を出しながらシュート練習にあけくれた。多分、シュートを打ちながら奇声を発するのはキャプテン翼ぐらいではないだろうか…。また、雨が振れば、「地面がやわらかいから今日はスライディングの練習だ」と雨の中、ずっと水たまりにスライディングを続けた。

上手くなったどころではなく、とにかく強烈な練習だった。でも、中学生になってから本格的にサッカーを始めた部員が大半である中、根性だけでなんとか試合に挑むことができたのも佃先生のイメージ溢れる？指導のおかげであったと思う。

私は中学1年、2年はキャプテンをやらせていただいた。しかし、何が理由であったかは忘れてしまったが佃先生と衝突し、「キャプテンをやめろ」「わかりました」と何故かその時は反発してしまい本当にキャプテンをやめてしまった。その後も、サッカー部のメンバーとして頑張ったが、佃先生がどういう意図をもって、やめろと言ったのか、そして本当はキャプテンを放り投げた私に何を期待していたのだろうか。佃先生はもう覚えていないであろうが、私の中では今でも答えがわからないままである。

高校生になり佃先生がサッカー部監督から退き、市川先生のご指導を受けるようになり、初めてサッカーの基本を指導をしていただいたのかもしれない。中学時代は根性！ディフェンダーは相手の足を刈ってなんぼ。点を取られる位ならファールとまあ、ボクシングの亀田家を彷彿とさせる指導しか受けてこなかった我々に対し、市川先生が高校生から普通のサッカーを教え直すのは本当に大変なことであったと思う。我々53期は全く違う二つの指導を3年ずつ受けることができた六甲至上最も恵まれた代であったと私は思う。

私の密かな自慢であるが、中学に入学してから受験の高校3年生を除く5年間に加え、卒業してからの17年間、計22回、一度も欠かすことなく初蹴りに参加している。それはやはり佃先生にご挨拶したい気持ちが一番にあったことであつた。しかし、ここ数年お会いする機会がなくなり一年前の訃報を受けた。この寄稿を書きながらも色々な思い出が甦り、つつい書く手を止めてしまっていることに気付く。今年はどうとう、仕事の都合で初蹴り皆勤賞の記録が止まる。今回の佃先生を偲ぶ会に参加出来ないことが非常に残



念である。

何時までも佃先生は私の最大の恩師である。私は佃先生のような大きな温かさをもった人物になれるようこれからも努力して行きたい。佃先生、ありがとうございました。

53期 川上大輔

「つくせん」という言葉を聞くと、六甲時代の記憶が走馬灯のように駆け巡る。

「つくせん」は、六甲生活を語るうえで、なくてはならない存在である。

「つくせん」には、毎日のように殴られた。

練習中にミスパスをすると、殴られた。

つま先を踏まれ、逃げられないようにしてから殴られた。

殴られたときは腹も立ったが、でも、それだけ私に目を掛けてくれていたということだと思う。

「つくせん」の厳しさは、私に「忍耐」を教えてくれた。

「シュートは打たな入らんやろ！」というセリフが忘れられない。

時々見せてくれる、あの笑顔はとても優しかった。

佃先生、本当にありがとうございました。
ご冥福をお祈り致します。

53期 小牧兼太郎

佃先生の最初の記憶は、六甲中学に入学して最初の体育の授業だったように思う。体育の授業の冒頭、全員整列して隊列の先頭が順番に番号を発するのだが、「イチ、ニ、サン、シ、ゴ、ロク、ナナ・・・」と進んだところで、「ナナじゃない、シチだ!」と「ナナ」を発した生徒に拳骨をした。瞬間、先生が怒った意味が正直よくわからず、これはえらいことやなど驚愕したことを思い出す。

それからサッカー部に入部し、また体育の授業も含めて佃先生に情熱をもって厳しくご指導いただいた。佃先生は我々が高校にあがるころ、サッカー部の直接指導から退かれたので、みっちり鍛えられた最後の世代だ。しょっちゅう怒鳴られ、拳骨もいっぱいいただいたことを思い出す。先輩方からは「昔に比べれば仏のようなものだ」と言われたものだが、数え切れないくらいの様々なエピソードが残っているように思う。

今回、この寄稿文を書くことになったとき、果たしてどんなときに怒られたのかという記憶をた

どってみたところ、以外と共通点があることに気づいた。大まかに整理してみると―

①部活をさぼった生徒がいたとき。(戻ってくるまで数時間延々と走ったこともあった)

②覇気のない生徒がいたとき。試合前にたるんだ雰囲気があった場合はなおさら。(グラウンドにたっていないくても、職員室からしっかりと観察されていた)

③期待する選手のやや生意気な態度に対しては特に。(期待する選手であればあるほど厳しく接しておられたと思う) etc…

在学中はひたすら理不尽な指導を受けていたと思込んでいたような気もするが、時間がたってみて改めて考えてみると、我々が怒られて当たり前のときに(機嫌が悪いときはそのハードルが極端に下がるのも事実だが)的確に指導されていたことに気づく。やっぱり当時、自分たちは子供だったということなのかもしれない。

高校を卒業して20年近くたち、それなりに部下をもって仕事をするようになった自分に当てはめてみればそれは歴然としているような気がする。チームの一員であるにもかかわらず、部下に仕事をさばられたり、やる気のないそぶりを見せられたり、はたまた期待している部下が経験もないくせに調子にのった発言をしたり。そんな時、自分も怒らずにはいられないわけである。怒らないと何も伝わらないこともしばしばだ。

とはいえ、他人に対し怒りの感情をぶつけることにとつもないエネルギーがいることも事実だと思う。つつい私は人に対して怒るのが面倒くさくなり、冷たい視線を送るだけでほっておくことも多々ある。そこから考えてみると、佃先生の生徒に対するパワー、愛情にはとてもかなわないのだとつくづくと思ひ知らされる。

社会に出てみると在学時代には比べものにならないくらいに理不尽なことに出くわす。昔にみたいにさぼってその場しのぎでしのげないことも多い。でも中高時代に培ったその経験が、その受けた指導が、意識をしないまでも自ずと世渡りの土台となり、日々の精神の支えとなっているように思う。やはり佃先生に足を向けて寝ることはできないと改めて思う次第である。

高校総体に敗れ現役が終わった時、佃先生からお手紙をいただいた。ご指導いただいた先生からお手紙を頂戴するのは、この時が人生の最初で最後だ。「私の現役指導最後を支えてくれた生徒たちへ」と題し、サッカー部員に対して感謝を述べ

られた。今でもその手紙は大切にあってあり、その御礼もこめて近況報告をしたかったが、その機会が永遠に失われてしまいとても残念だ。

そこで先生にこれまでのご指導に対する感謝と御礼の言葉を申し上げて寄稿文の締めにしようと思う。「佃先生、本当に今までありがとうございます。今となっては先生に熱血指導を受けたことの意味が少しずつわかってきたような気がします。心安らかに眠りください」

53期 小嶋寿史

佃先生は、学生の人格に影響を及ぼすような、偉大な先生だったと思います。闘志や根性という言葉がぴったりの方でした。弱気な態度には手厳しかったですが、勇猛果敢であれば、結果を責めることはありませんでした。敢然と立ち向かう気持ちを重視されていたと思います。

ある日、ダイビング・ヘッドの練習をしました。地面に擦れてゲーム・シャツが破れ、火傷の痕がまだお腹に残っています。

ある日、速く走る練習をしました。最新のトレーニング法とかいって、腰にゴム・チューブをくくりつけて別の人に引っ張ってもらい、強制的に速く走らされます。ほんまかいなと思いますけど、熱い指導でした。

ある日、保健体育の授業で、オスグット・シュラッテル氏病について教わりました。下校の坂道をそろそろ歩いて、みんなでオスグット対策をしました。

どれも楽しい思い出です。他界でも裸足でボールを蹴っておられるのでしょうか。いつかお会いできるのが楽しみです。

53期 杉本修二

佃先生との思い出と言えば、蹴られるし、殴られるし、挙句の果てに「眼噛んで○んでしまえ」と暴言まで吐かれる始末。

これだけ書くと、辛い思い出のようにしか聞こえないが辛いどころかむしろ、懐かしく愛着さえ感じてしまうから不思議だ。

当時は怖いという思いが強かったが、今思い返

すとあえて、そうすることで私たちに教育して頂いていたんだろう。

生徒への愛情の裏返しだったと思う。

本当は優しいお方だし、厳しく接することが辛かったのではないだろうか。

おかげさまでというべきか、少々のことではへこたれないのは当時、心身ともに鍛えていただいたからだと思う。

六甲を卒業してから18年、今は一社会人として働いているが、会社で自分の意に反するようなことが起きた時は、自然と前述の名台詞「眼噛んで・・・」と呟いてしまう。

そして、そのたびに佃先生の存在の大きさを感ずるとともに、当時が懐かしくなる。

53期 倉克哉

「佃先生へ

あいつらがスキーから戻ってくるまで走っておけ、と言って頂きありがとうございました。無理難題に遭遇した時の対処方がなんとなく身に付きました。

部練をサボったチームメイトにその場で電話させて頂きありがとうございました。チームの一体感が強まりました。

中二の夏、サッカー部6人での小豆島旅行がバレた時、訓育室で叱って頂きありがとうございました。その時しかできない打ち込むべきことを気付かされました。

校則に反しユーミンのCDを鞆に隠し持っていたことを見つけて頂きありがとうございました。ルールを守ることを学びました。

第二グラウンドを駐車場として使用していたことを学校側に意義申し立てをして頂きありがとうございました。硬く押し固まったグラウンドで怪我せずにすみしました。

同期サッカー部の結婚式のお祝いビデオ撮影を快く受けて頂きありがとうございました。少々編集が大変でしたが、その表情とそのお言葉で式場が和やかになりました。

頭をど突く真似をして、脛を蹴って頂きありがとうございました。叱るときもユーモアを忘れない優しさを感じました。

内気だったチームメイトに大声で‘パスをくれ’

と何回も連呼させて頂きありがとうございました。その後彼は、‘海が好きだー’と叫ぶ罰ゲームも難なくこなしていました。

強歩会の練習で庭園を走るとき、木の陰に隠れサボってないか監視して頂きありがとうございました。次の隠れ場所を気にしながら走り続けたら、体力がついていました。

サッカー部二人と見つからないように庭園を降りて部練をサボって帰った時に、見つけなくて頂きありがとうございました。その後、見つかった時よりも胸が痛くなりました。

試合後の感情を分かり易く表情に出して頂きありがとうございました。勝つことへのこだわりと負けることの悔しさが身に付きました。

気合い重視のサッカーを教えて頂きありがとうございました。今でも細々とサッカーを続けていて気合いが空回りする傾向ですが、気にせず堂々とプレーできております。

サッカーを通してサッカー以外の重要なことを多く学びました。

上手く表現できませんが、根性 熱い心 厳しさ 徹底 優しさといったことも。

中途半端 甘え 妥協 自分勝手 逃げ とは対極のニュアンスのこと。

色んな思い出がありますが、どれも大きな愛情が根っこにありました。

そのツクセンの愛情を次世代に伝えていくのが私たちの使命です。」

この手紙を初蹴りの朝、二本杉の木の下で渡したかったです。ただ、そんな教え子の気持ちをも、ツクセンには汲んで頂けている気がしています。

53期 山本桂輔

佃先生には大変お世話になりました。

在籍時には鉄拳も受けました。

当時は、納得がいかず、反抗の意思を見せたこともあったと思います。

そんな私が、先生の当時の思いや辛さが少し分かるようになったのは、自分が親になってからでした。

私は、先生のように、世代を超えて慕われるほど大きなものは持ち合わせていませんが、まずはわが子や、身近に接する人たちに、きっと正しい

と思う道へ導くよう、愛情を持って接していきたいと思えます。

いずれはわかってもらえるかと信じて。
ありがとうございました。

53期 飯尾浩平

皆が練習しているグラウンドで一人声を出す練習をさせられたり、試合中にミサンガを引きちぎられたりと、熱血指導を受けながらなんとか認めてもらおうともがいていた学生時代でした。

入学当初に(ウイングは)人とは違うトリッキーなプレーをしろと言われたその一言が、今でも座右の銘となっています。

それでも佃先生を思い出すときは屈託のない表情の先生です。サッカーを心から愛し、学生のことを親身に考えて生きてこられた佃先生の魂は、佃チルドレン達によって後生へと引き継いでいかれると信じています。

53期 井田求

少年のシニカルな態度、虚勢、反抗に対して無骨な情熱をもって常に挑まれました。

並外れた情熱をもった先生でした。佃先生の怒声、激励、笑顔それらを憶え続けてゆくことが、教え子の仲間に入れて貰った者の大きな財産だと思えます。



44期 佃和弥

「父へ」

検査のために入院した時も、長時間の手術に挑んだ時も、リハビリのため転院した時も、そして最後の時も、私はそばにいませんでした。

「死ぬわけがない」
根拠のない… 油断でした。

だからあなたが逝ってしまった という知らせを受けた時はうろたえました。

自宅に戻ると、そこにあなたはなんとも穏やかな、やさしい顔で眠っていましたね。

不思議とホッとしました。

そうして あなたの死 という現実を受け止めたとき “油断するな” あなたの声が聞こえた気がしました。

「確かに油断した。ごめんなさい」

それから大勢の方があなたに逢いに来てくれましたね。

たくさんのお思い出を聞かせていただきました。

「そういえばそんなこともあったな」

懐かしいこともありましたが、

「へー そんなこともあったのか」と初めて知ることのほうが多いことに唖然。

そういえば、二人でゆっくり話をする事などなかったですね。

ここでまた “油断するな”

「ごめんなさい」

少し落ち着いてからもちよくちよくあなたは “油断するな”

そのたび「ごめんなさい」

あれから半年以上が過ぎました。

相変わらず、たくさんの方があなたとの思い出を聞かせてくれています。本田先生は、あなたへの思いを詰め込んで 六甲歌集を再版してくださいましたよ。

変わったことといえば、最近聞こえてくるあなたの声

“これからは 油断するなよ”

あの時の穏やかな、やさしい顔で語りかけられます。

これからは油断せず、母や兄弟、家族そして出会ってきた仲間との時間を大事にしようと思うのです。「そういうことですよ？」

“油断するなよ”

「了解！ ありがとう！！」

息子より

教え子、そして息子としての立場から追悼文ということでしたが、在学中の6年間を振り返ると、 $1+1=2$ にならず、どちらの立場も中途半端で $1=0.5+0.5$ だった気がして“追悼文は無理”と勝手に、早々に諦めさせていただきました。

そこで、まったくもって私的なもので恐縮なのですが、息子として、今どうしても父に伝えておきたいことを、父にあてた手紙として書かせていただくことにしました。

亡くなった父の顔を見たときに聞こえた“油断するな”は、父のではなく、親不孝を悔いている私自身の声だったのかもしれませんが。

それからしばらくの間は、“油断するな”「ごめんなさい」と振り返っての後悔ばかりでした。

最近になって、ようやく肩の力を抜いて父の遺影と向き合えるようになってからは、“油断するな”は、これからは“油断するなよ”という激励に変わったように感じています。

“油断するなよ”は父が残してくれた言葉と信じて、「ありがとう、頑張ります」

追悼文としてはそぐわないものかもしれませんが、しかも力を抜きすぎて、稚拙な文章で申し訳ありません。ご容赦ください。

最後になりましたが、生前の皆様のご厚情に、父に代わり感謝申し上げます。

ありがとうございました。



佃先生、有難うございました。

© 六躰会

この文集に掲載している文章・写真の無断転載はお断りします。



企画・制作

六蹴会